

練馬区立大泉桜学園 検証報告書（たたき台）

第4章 検証結果

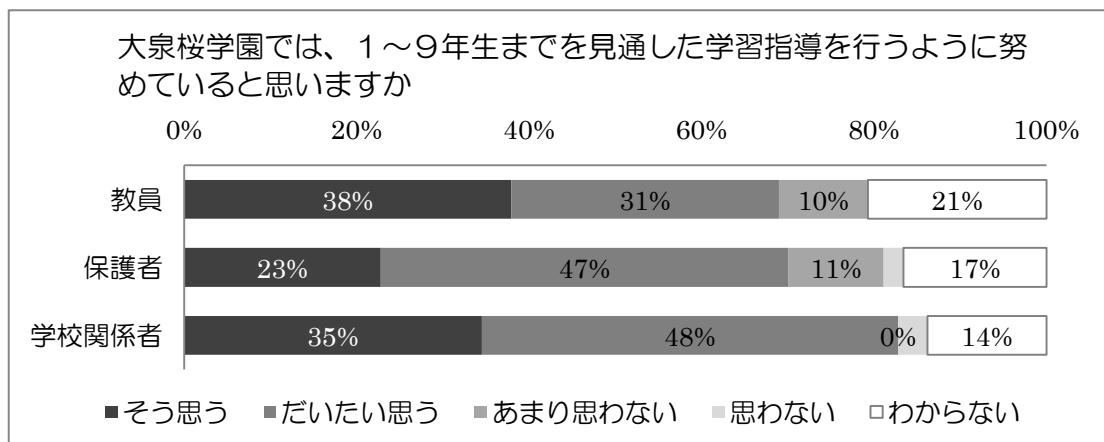
- 1 9年間を見通したカリキュラムを作成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導及び生活指導の充実を図ることができる。

(1) 9年間を見通した学習指導

大泉桜学園では、知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成を目指す教育目標を設定し、大泉桜学園や地域社会に実態及び児童・生徒の心身の発達を十分に考慮して、9年間で3期に分け各段階におけるねらいや重点を明確にして、9年間の一貫した教育課程を編成・実施してきた。

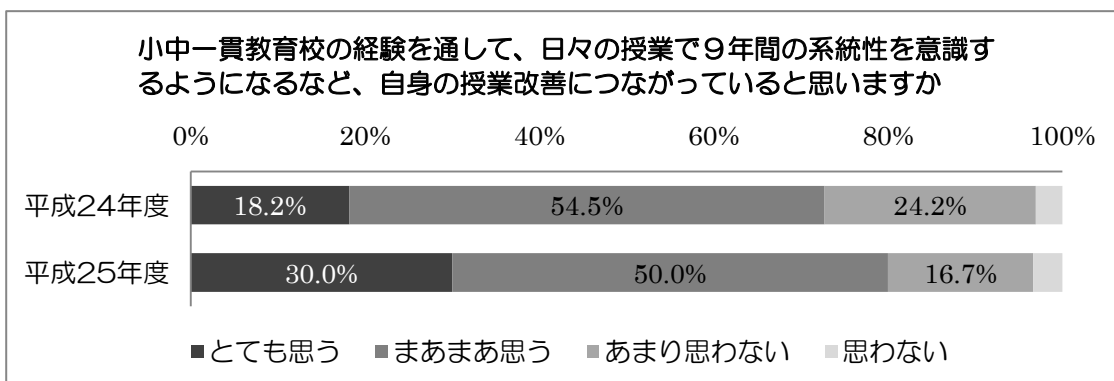
学習指導上における各期の考えた方	
I期（1年から4年まで）	基礎・基本を繰り返して、習熟を図る時期とし、学びに基本姿勢を身に付けることを目指す。
II期（5年から7年まで）	基礎・基本を生かして、具体的なものを考える時期から論理的・抽象的思考へと移行し時期とし、意欲的に学ぶ姿勢を身に付けることを目指す。
III期（8年から9年まで）	基礎・基本を応用して、論理的・抽象的思考を着実にを行う時期とし、主に学ぶ姿勢を身に付けることを目指す。

<検証アンケート（平成26年度実施）より>



教員のうち69%、保護者のうち70%、学校関係者のうち83%が肯定的な回答である。また、教員、保護者、学校関係者の順に肯定的な回答が高くなる傾向が見られ、特に学校関係者である地域の期待が高くなっている。

<大泉桜学園教員意識調査（平成 26 年度実施）より>



平成24年度の肯定的な回答が72.7%であるのに対して、平成25年度の肯定的な回答は80%であり、7.3ポイントの増加が見られる。

平成24年度と平成25年度と比較して、「とても思う」と回答した割合では11.8ポイントの増加し、「あまり思わない」と回答した割合では7.5ポイントの減少している。

<各種学力等の調査結果より>

全国の平均正答率に対する大泉桜学園の平均正答率の割合を百分率で表しています。

■国語

6年

全国学力学習状況調査

国語A	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	108.8	107.2
	全国	100.0	100.0

国語B	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	93.5	108.3
	全国	100.0	100.0

練馬区学力調査

国語	%	平成25年度	平成24年度	平成23年度
	学校/全国	101.0	102.5	102.2
	全国	100.0	100.0	100.0

9年

全国学力学習状況調査

国語A	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	101.8	100.8
	全国	100.0	100.0

国語B	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	94.3	99.4
	全国	100.0	100.0

練馬区学力調査

国語	%	平成25年度	平成24年度	平成23年度
	学校/全国	99.5	111.0	104.3
	全国	100.0	100.0	100.0

■算数・数学

6年（算数）

全国学力学習状況調査

算数A	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	102.6	106.6
	全国	100.0	100.0

算数B	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	96.4	111.0
	全国	100.0	100.0

練馬区学力調査

算数	%	平成25年度	平成24年度	平成23年度
	学校/全国	104.0	91.6	99.6
	全国	100.0	100.0	100.0

9年（数学）

全国学力学習状況調査

数学A	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	102.8	103.1
	全国	100.0	100.0

数学B	%	平成26年度	平成25年度
	学校/全国	106.5	97.8
	全国	100.0	100.0

練馬区学力調査

数学	%	平成25年度	平成24年度	平成23年度
	学校/全国	99.7	127.9	104.8
	全国	100.0	100.0	100.0

全国学力学習状況調査の国語において、6年及び9年ともに国語Aでは、平成25年度と平成26年度と比較して、平均正答率の上昇傾向が見られ、全国平均を上回っている。一方で国語Bでは平均正答率の下降傾向が見られ、全国平均を下回っている。

全国学力学習状況調査の算数・数学において、6年及び9年ともに算数・数学Aでは、「平成25年度と平成26年度と比較して、平均正答率の下降傾向が見られるが、全国平均では上回っている。一方、算数Bでは平成25年度と平成26年度と比較して平均正答率の下降傾向が見られ、全国平均も下回っている。数学Bでは平均正答率の上昇傾向が見られ、全国平均を上回っている。

練馬区学力調査の国語において、6年及び9年では平成24年度から平成25年度に対しては上昇したが、平成25年度から平成26年度に対しては下降している。

練馬区学力調査の6年の算数では、平成24年度から平成25年度に対しては下降したが、平成25年度から平成26年度に対しては上昇している。一方、9年の数学では、平成24年度から平成25年度に対しては上昇したが、平成25年度から平成26年度に対しては下降している。

<教員ヒアリング（平成26年度実施）より>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
9年間を見通したカリキュラムを作成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導及び生活指導の充実を図ることができる	9年間を見通した教育課程の編成状況	中学校でどういことを大切にしているのかを聞いて、それを大切に小学校でも教えられる。例えば理科は、中学校では推察して結果をまとめることが大事なので、小学校でもそれに長く時間を取るようになっている。算数でも中学校では数式を横ではなく縦につなげていく。また、中学校の国語では語彙力が必要なので、それも早めにやっておく。	教員 (小)
		技術科の指導については、図画工作との関連は意識して取り組んできた。例えば、塗装を教えるにも、小学校でニスの塗り方を教えていると分かれば、中学校では違う塗装を教える。穴あけでも小学校でキリを使っていたら、中学校では機械を使ってみるなどということがスムーズにできたと思う。道具や機械の使い方、安全への配慮は小中でつながっている。小学校で学んできたことを理解でき、効率よく進められたと思う。	教員 (中)
		カリキュラムをすべて研究する時間はとれないが、職員室で話をする中でカリキュラムの理解が進む。理科室の教材の貸し借りや、準備室の冷蔵庫を使うなどのやりとりをしている。子供にとっては中学校の教員というだけで見る目や受け取り方が全然違う。小学校に教えに行くことで、カリキュラムの理解ができて教員にとっても子供にとってもメリットは大きい。	教員 (中)

教員対象のヒアリングから、小中学校での取組や関連する教科とのつながりが見えるようになり、9年間を見通した学習指導を意識して取組めるようになったとの意見が見られる。

■ 検証部会でのご意見

9年間のスパンの中で子供の学力をいかに改善できるかといおうことが、小中一貫教育の大きな特色である。小学校教員と中学校教員の学力観で、一番違うのは評価観であり、指導とどのように結び付けて一体化を図っていくかが課題である。

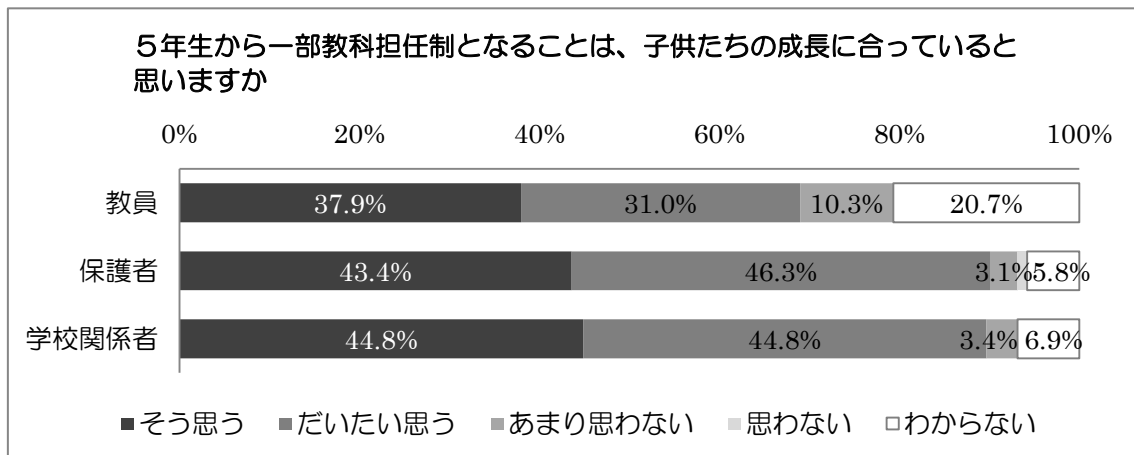
■ 考 察

- ・ 検証アンケートから、教員、保護者、学校関係者ともに肯定的な回答が約7割と高く、学校の取組が広く浸透している。特に学校関係者の割合が高いことから、大泉桜学園の取組に対する地域等の学校関係者の期待が反映していると考えられる。
- ・ 大泉桜学園教員意識調査では、9年間の系統性を意識した授業や自身の授業改善に対する手応えを感じる教員の割合が増加している。また教員ヒアリングからも、小中学校の接続や関連に配慮した取り組みや教員間の連携に関する発言が見られることから、9年間の系統性を意識した学習活動が定着しつつあると考えられる。
- ・ 学力調査の結果から、開校後の学力の向上について顕著な成果が表れているとは必ずしもいえない。ただし、大泉桜学園教員意識調査から9年間の系統的な学習活動への意識の変化や取組が見られることから、学力向上への成果については、今後も継続して検証する必要がある。

(2) 5・6年生の一部教科担任制

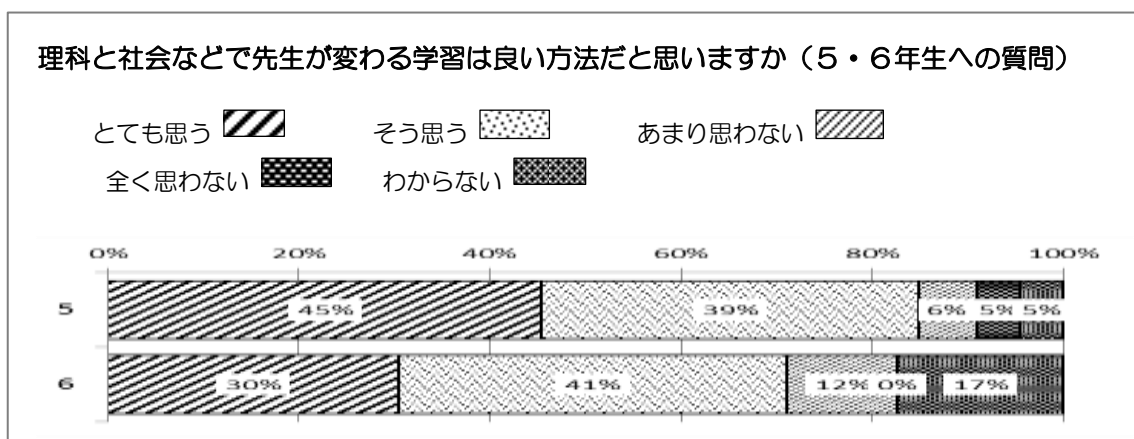
中学校の教科担任制への円滑な移行や学習内容のより一層の充実を目指し、5・6年生の理科と社会で教科担任制を取り入れた。これは、通常の小学校で実施している図画工作や音楽、高学年の家庭科に加え、5・6年の学級担任が社会と理科を分担して指導するものである。このことにより、学級担任間において学年一人一人の児童への理解が深まるとともに、教科の特色に応じた教材研究を深めることが可能となり、学習活動の充実が期待されると考える。また一部教科において、中学校籍の教員が授業の一部を担当している。

<検証アンケート（平成26年度実施）より>



教員のうち70.9%、保護者のうち89.7%、学校関係者のうち89.6%が肯定的な回答である。特に保護者及び学校関係者では約9割近くが肯定的な回答であり、「そう思う」と答えた割合は4割を超えている。

<平成26年度学校評価アンケートより（5・6年生）>



5年生のうち84%、6年生のうち71%が肯定的な回答である。また6年生に対して5年生では13ポイントと高くなっている。

<教員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
9年間を見通したカリキュラムを作成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導及び生活指導の充実を図ることができる	4-3- 2 の区分における発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導の充実	5・6年生が50分授業や一部教科担任制を体験することは、スムーズに7年生になっていける流れをつくることになる。小学校の教員が同じ授業を2度、3度やって改善できるという機会はめったにない。教材研究できるし授業改善できる。教員側の変化は大きいと思う。教科担任制でもっと面白いことができそうと思った。	教員 (中)
	5・6年生の一部教科担任制の効果	教科担任制で専門性のある教員が授業に携われば子供たちの学力も飛躍的に伸びるのでいいことだと思う。授業をやると隣の学級の様子も分かるので児童理解が進む。	教員 (小)

教員対象のヒアリングから、一部教科担任制に対して肯定的な回答が見られ、5・6年生も適応し中学校への円滑な接続につながるとの意見も見られる。

■検証部会でのご意見

校舎が変わる5、6年生において、一部教科担任制を取り入れたり、中学校教員による教科指導を行ったりすることは、中学校への円滑な接続において有効であると考えられる。

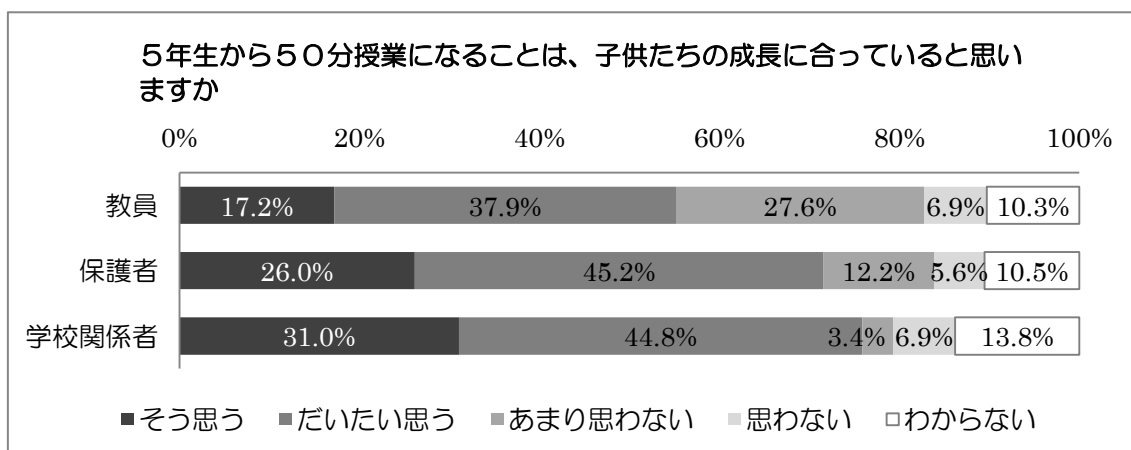
■考 察

- ・検証アンケートから、5・6年生の一部教科担任制について、教員、保護者、学校関係者ともに肯定的な回答の占める割合が高く、特に保護者や学校関係者では8割以上となり期待の大きさを伺うことができる。
- ・教員ヒアリングからも、5・6年生の一部教科担任制の拡大が、6年から7年への円滑な接続と教員の授業改善や学力の向上へとつながると考えている教員がいる。
- ・6年生と比較して5年生の肯定的な回答が高い背景に、東校舎から西校舎へと学校での生活環境が変化することに対して、不安よりも期待感が高まっているととらえることができる。

(3) 5・6年生の50分授業

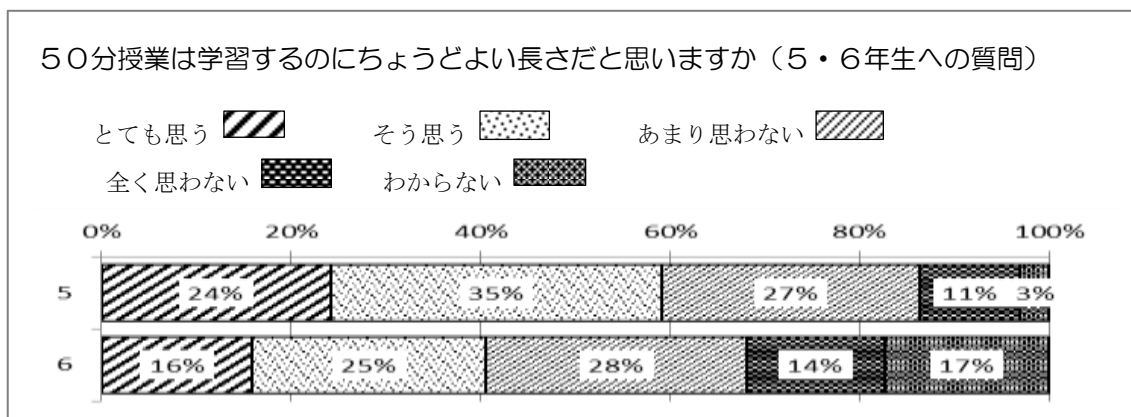
1年生から9年生までの児童・生徒が合同で教育活動に取り組むことができるよう、全学年の1校時と5校時の開始時刻を合わせるなど、学習環境を整えている。さらに5・6年生より7・8・9年生と同じ西校舎へ移り、生活時程も50分授業に統一して実施している。

<検証アンケート（平成26年度実施）より>



保護者及び学校関係者の7割以上が肯定的な回答であるのに対して、教員の肯定的な回答は6割弱である。一方、教員のうち否定的な回答が3割を超えている。

<26年度学校評価アンケートより>



5年生のうち肯定的な回答が約6割であり、6年生と比較して18ポイント上回っている。5・6年生ともに否定的な回答が約4割であるが、一方で「わからない」と回答した6年生が5年生と比較して14ポイント上回っている。

<児童生徒会役員ヒアリング>

- ・もう50分授業だと自慢ができる。休み時間が10分あって次の授業の準備もできる。
- ・まだ小学生なのに何で50分なのかと思った。
- ・50分授業はやっているうちに慣れた。

■ 検証部会でのご意見

配慮を要する児童・生徒がいる学級を担当する教員の中には、授業時間が5分間異なるだけでも影響は大きいと受けて止めている場合も見られる。このことから実際に学習指導や生活指導を行っている教員と、具体的な様子が分からない保護者等とのギャップが生じ、検証アンケートの結果に表れていると考えられる。

■ 考 察

- ・保護者や学校関係者の肯定的な回答が7割を超えているのに対して、教員及び5・6年生の肯定的な回答が低い傾向が見られる。
- ・児童会生徒会役員へのヒアリングでは、5・6年生が7年生以上と同じ50分授業に対して疑問を感じている児童がいる。一方で、50分授業に慣れ日常化していることや授業間の準備時間が10分になることで、教室移動や次の授業の準備が円滑になっているとの意見も見られる。
- ・生活時程の違いは小中学校の段差の一つである。生活時程の変更が5・6年生の学習活動にプラスになっていると実感できるようにするなど、工夫する必要がある。






2 小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかなものにし、円滑な移行が図られる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる

(1) 学校生活への満足度

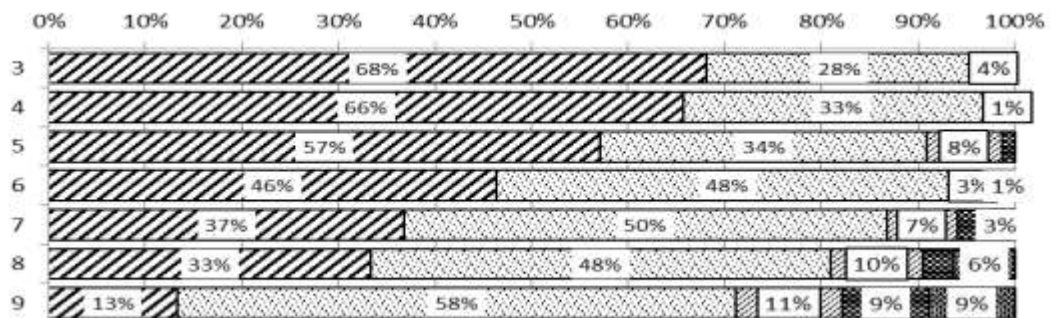
9年間にわたる一貫した教育課程を計画的・継続的に実施することで、児童・生徒の発達段階に応じたきめ細やかな学習指導や生活指導を推進し、児童・生徒一人一人の個性や能力を伸ばす教育の充実を図ってきた。

<学校評価アンケートより（児童生徒対象）>

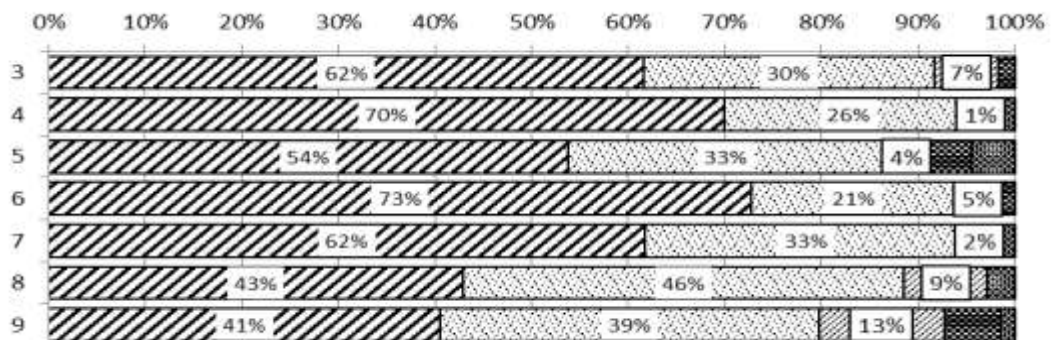
学校に楽しく通っていますか

とても思う  そう思う  あまり思わない 
 全く思わない  わからない 

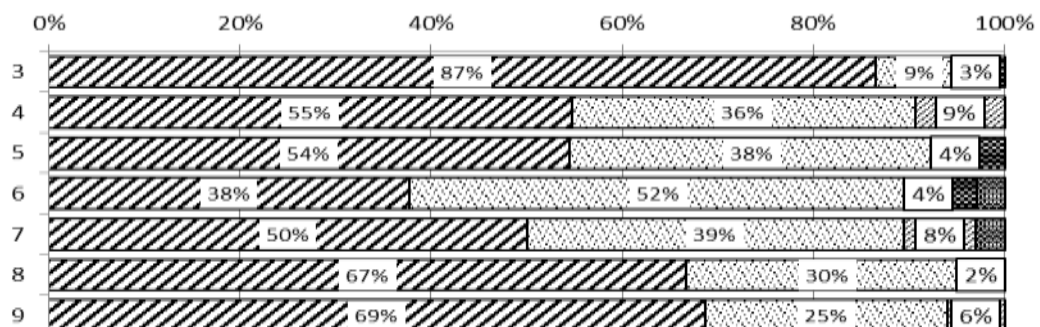
平成 24 年度



平成 25 年度



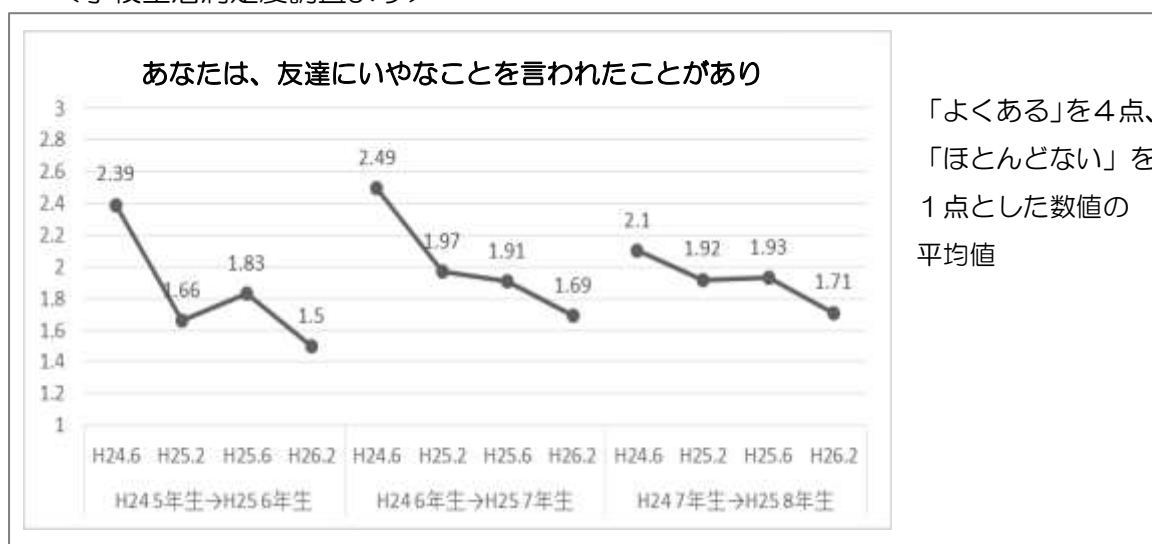
平成 26 年度



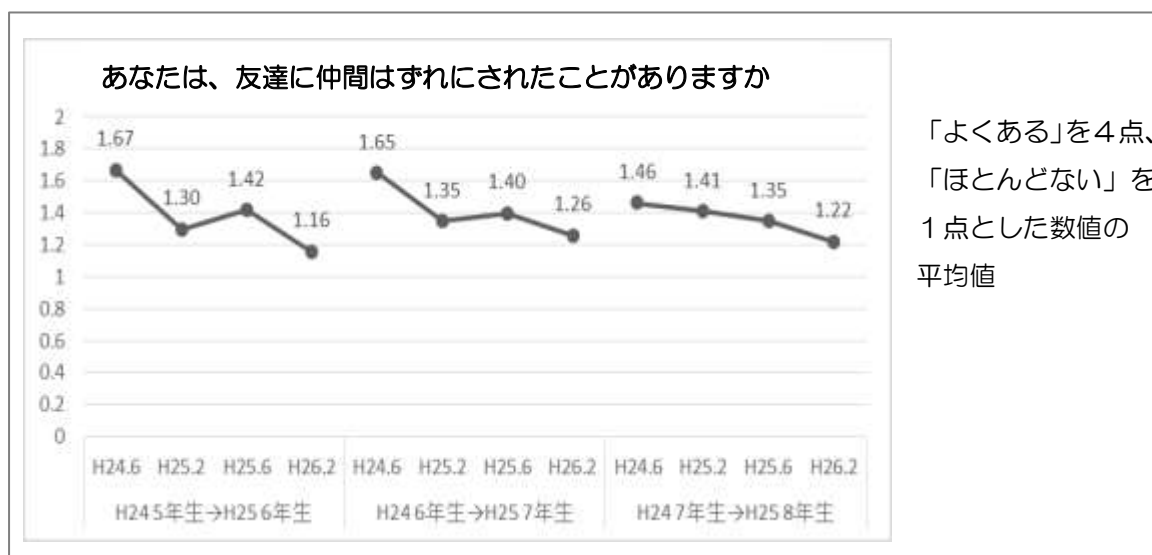
平成24年度及び平成25年度の肯定的な回答において、特に9年生の割合が他の学年より下回っている。これに対して、平成26年度では全学年の9割近くが肯定的な回答である。

平成24年度から平成25年度、平成26年度の「とてもそう思う」の回答では、特に8年生、9年生の割合が増加している。

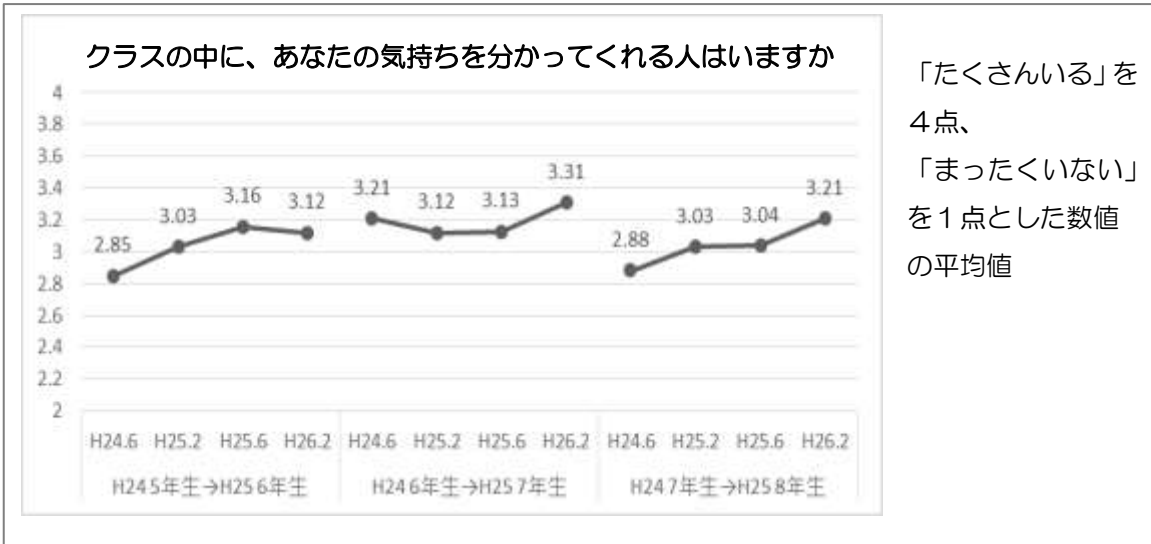
<学校生活満足度調査より>



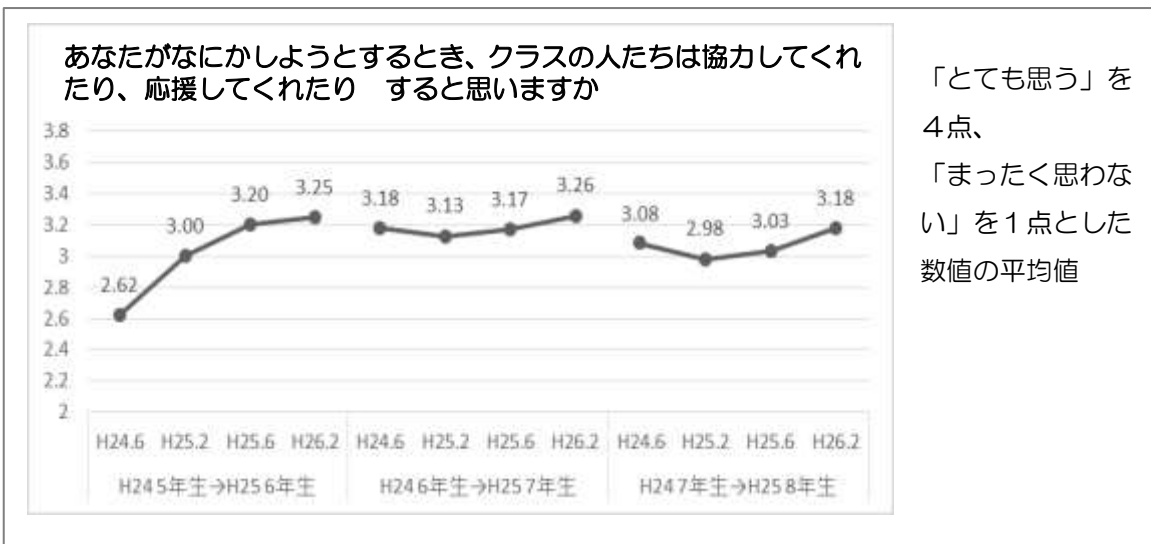
同じ学年集団における時系列の変化については、どの学年集団においても平均値が減少している。



同じ学年集団における時系列の変化については、どの学年集団においても平均値が減少している。



同じ学年集団における時系列の変化については、平成24年度に5・7年生であった学年集団では平均値が上昇している。また、平成24年度に6年生であった学年集団では一旦は下降したが、その後微増傾向が見られる。



同じ学年集団における時系列の変化については、平成24年度に5年生であった学年集団では平均値が上昇している。また、平成24年度に6・7年生であった学年集団では、一旦は下降したがその後微増傾向が見られる。

■ 検証部会でのご意見

学校評価アンケートから3年間の経過を見ると、学校を楽しく通えている肯定的な回答の割合が次第に高くなってきている。こんなことから、大泉桜学園が開校してから、その効果が少しずつ表れていると考えられる。

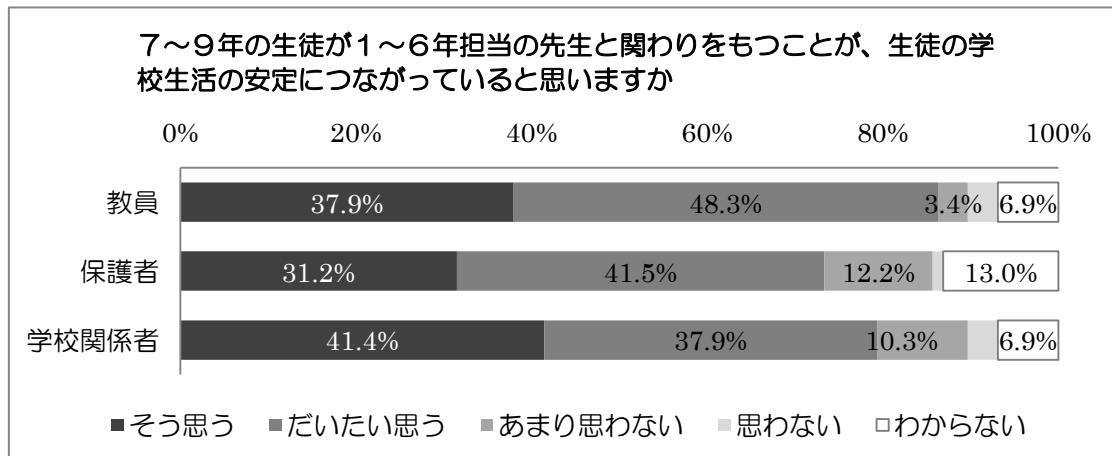
■考 察

- ・学校評価アンケートから、平成24年度から平成25年度、平成26年度へと肯定的な回答の割合が増加し、さらに8・9年生においては「とても思う」と回答した割合が高くなっていることから、学校生活を楽しく過ごしている割合が高いと考える。
- ・学校生活満足度調査から、同じ学年集団における時系列の変化を比べると、学校での生活が定着し経過するにつれて、肯定的な回答に変化している学年集団や項目が増加している。ことから、学校生活への円滑な適応が進んでいると考える。
- ・平成24年度と平成25年度における同じ学年を比べると、平成25年度の方が概ね肯定的な回答の傾向が見られ、児童・生徒の学校生活への適応が進んでいると考える。

(2) 小中教員の協力体制

大泉桜学園では、校長1名、副校長3名のもと、各分掌において小中教員が所属し協力して学校運営に当たってきた。また、小中教員が合同で校内研究に当たるとともに、小学校教員が中学校教員とともに部活動の顧問を担当している。

<検証アンケート（平成26年度実施）より>



教員、保護者、学校関係者ともに、7割の以上が肯定的な回答である。また、7年生から9年生に対して、1年生から6年生の教員が関わりをもつことが生徒の学校生活の安定につながっていると回答をする教員は86.2%である。

<教員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかなものにし、円滑な移行が図られる。その結果、不登校生徒を減少させる	円滑な移行による安定した学校生活	小中一貫教育校の利点としては、長いスパンで見ている、それを生かして子供たちに対応できることである。児童の成長のモデルである中学生が目の前にあるので、小学校籍の教員にも子供たちがどうなっていくのかの見通しが立つ。例えば、7年生で保護者が外で働いたりして家庭環境が変わることによる子供の変化も、3年生の時どういう子供だったかを知っているの、その後の小学生の指導に活かせる。	教員 (中)

こともできる。		5・6年生から西校舎になるので、中学校籍の教員からも顔が見える。何かあれば話しかける。1～4年生は東校舎なのであまり接しないが、教員は職員室が同じなので1～4年生についても把握できる。職員室が一つというのは最大のメリットであり、自分のキャリアにとってもすごくプラスである。	教員 (中)
		上級生が穏やかになった。小さい子供に優しくしているからだろう。また、小学校時代の教員がいるからあまり馬鹿なことができない。	教員 (小)
		滑らかな接続ができている反面、7年生が幼い。小学7年生に見える。通常、中学生になると廊下でじゃれ合う姿はなくなるが、今はそういう幼い姿がある。その代りに困った行動は起こさないという面もある。	教員 (中)
	学校の生活指導 に取り組み体制 や問題行動への 対処	7年生の生徒が生活指導上の問題を起こしたが、5年生の時にも同じことがあり、それを情報提供した。5年生の時のことを知っているのと知らないのとでは違う。同じパターンを繰り返さないようにするための指導ができる。	教員 (小)
		生活指導面における成果は、何かあった時に情報共有しやすいことである。ちょっとでも情報があるだけで違う。職員室が一つであることの意味を大きい。	教員 (中)
	4-2-3の区 分における発達 段階に応じた計 画的・継続的な 生活指導の充実	大きな段差を経験していないのが不安である。緊張感がなく、先輩・後輩も友達感覚で7年生が8年生に同等の言葉を使っている。	教員 (小)
		7年生の適応はすんなりいっていると思う。何かあった時に小学校の教員がいることが大きい。あとは、8・9年生をずっと見てきたことによる安心感もあると思う。	教員 (小)

教員対象のヒアリングから、Ⅱ期における円滑な接続において肯定的な意見が見られる。

■ 検証部会でのご意見

小中一貫教育校として開校から4年かが経過し、開校当時の教員よりも、開校後に移動してきた教員も増えてきている。校内体制等を整えていくことも大切だが、教職員間の人間関係や学校経営方針の具現化に向けて協力して取り組む職場風土など、働く環境を整えていくことも大切であると考えられる。

■ 考 察

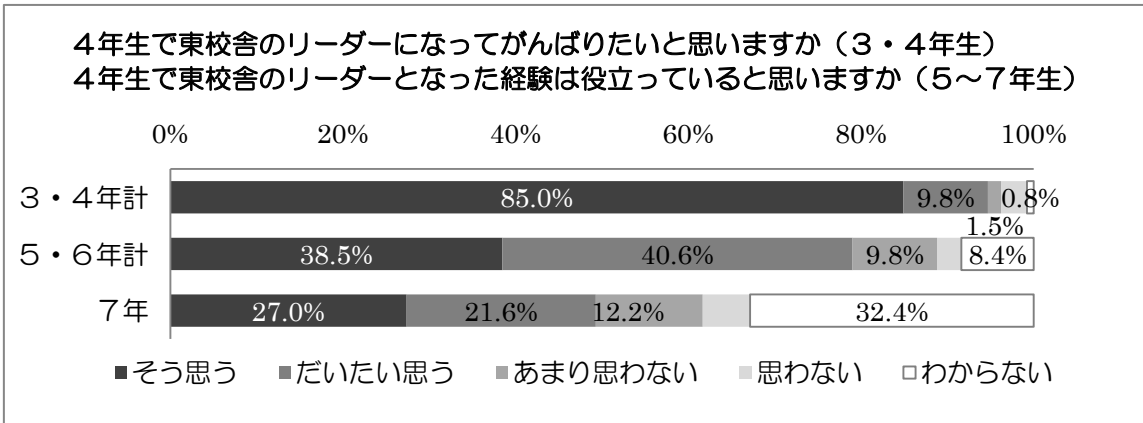
- ・ 検証アンケートから、大泉桜学園の教職員が協力して児童・生徒への指導を組織的に取り組む体制が整ってきていると考えられる。その結果、7年生から9年生まで生徒が安定した学校生活につながっていると考える教員が多い。さらに、保護者・学校関係者の約7割が同様に考えている。
- ・ 教員ヒアリングから、小中教員が同じ職員室にいて相互関係を築かれ、生活指導上の問題等に対応できていると考える教員も見られる。

(3) 4-3-2の区分

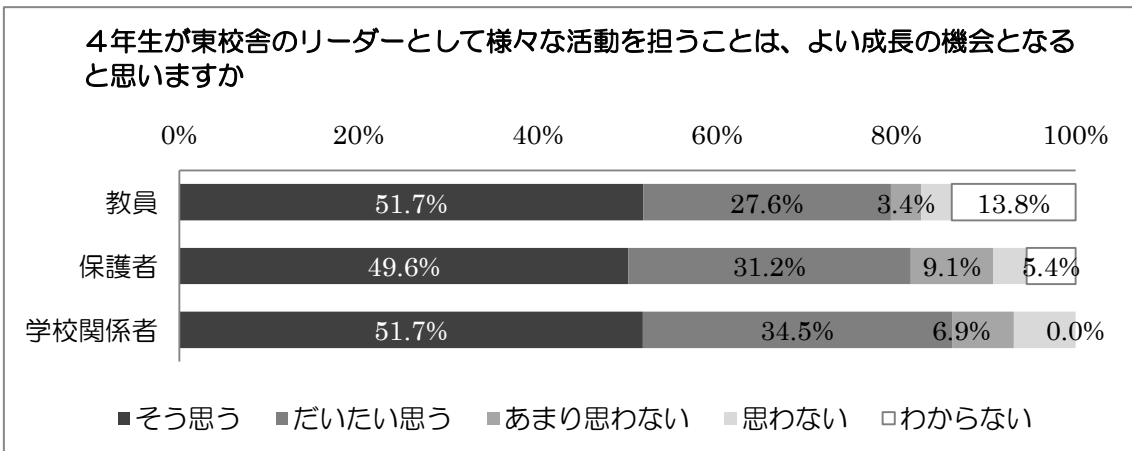
練馬区の小中一貫教育では、9年間をⅠ期（1～4年）、Ⅱ期（5～7年）、Ⅲ期（8・9年）の区切りで捉えている。

期ごとの活動として、期別朝礼（桜学朝会）、Ⅰ期では東校舎の委員会活動、たてわり班活動、たてわり遠足、Ⅱ期では飯盒炊爨、Ⅲ期では卒業論文の作成などがある。

<検証アンケート（平成26年度）より>



3・4年生では94.8%、5・6年生では79.1%が肯定的な回答である。一方、7年生では48.6%が肯定的な回答である。



教員、保護者、学校関係者ともに、8割以上が肯定的な回答である。

<教員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかなものにし、円	4-3-2の区分における発達段階に合わせた計画的・継	今の5年生は4年生の時と比べて意識が違う。2年前から4年生の校舎での卒業式となる「虹を渡ろう」という行事をやっているが、5年生には西校舎にいったのだからしっかりやるという意識が芽生えている。宿題をやってくるようになったり、持ち物をきちんと持ってくるようになったり、特に女子の場合は先輩への憧れもあるみたいだ。	教員(小)

滑な移行が図られる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。	続的な生活指導の充実	5・6年生の顔が見える。何かあれば話しかける。1～4年生は東校舎なのであまり接しない。5・6年生担当の教員は、1～4年生から5年生への接続に課題を感じているかもしれないが、教員は同じ職員室なので1～4年生についても把握しているように見える。1～4年生と5年生との接続については、5・6年生の教員に聞かないと分からない。職員室が一つという最大のメリットである。すごく大きい。自分のキャリアにとってもすごくプラスである。	教員 (中)
-----------------------------------	------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------

教員へのヒアリングから、特にⅠ期からⅡ期への接続において、「虹を渡ろう」の行事や、小中教員の日常的な連携や情報共有が果たす役割が大きいことが考えられる。

■検証部会でのご意見

9年間の学校生活の中で、児童・生徒が様々な機会を通じてリーダー性を発揮する場面を研究し取り組んでいる。また、児童・生徒がリーダー性ととも、自らの判断で正しく行動するための力や協力していく力を身に付けていくことも大切であると考えられる。

■考 察

- ・東校舎のリーダーとして4年生が、委員会活動や縦割活動等、様々な機会を通じて意欲的に取り組んでいることや、教員・保護者・学校関係者がその取組が4年生にとって成長の良き機会となっている。
- ・東校舎から西校舎へと移動する5・6年生の8割近くが4年生で取り組んだことが役立っていると肯定的な回答をし、Ⅱ期に向けての意欲につながっていると考える。
- ・7年生において、肯定的な回答が5割を下回る一方で、「わからない」と回答している割合が3割を超えている。このことについて、教員のヒアリングからⅡ期のリーダーとする7年生の取組について、5・6年生との7年生との関わりやリーダーとして活躍する機会の設定について課題がみられる。
- ・学校行事の工夫や施設の有効な活用、日常的な小中教員の連携や情報の共有などが効果を上げていていると考える。

(4) 養護教諭の協力体制

大泉桜学園では、小学校と中学校にそれぞれ養護教諭を配置している。東校舎と西校舎に保健室を配置している。

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかなものにし、円滑な移行が図られる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。	4-3-2の区分における発達段階に応じた計画的・継続的な生活指導の充実	小学生は家庭的な保護者のような役割を養護教諭に求めている。保健室への来室もかなり頻繁で重症なものは少ない。保健室は安心を与える役割をする。中学生になると大きい怪我の来室が多い。精神的に不安的になりやすい時期でもあるので、今辛いということで来室することもある。	教員 (中)
		5・6年生は西校舎で生活しているが、一息つきたい時に、わざと東校舎（旧小学校舎）の保健室までくる子供がいる。	教員 (小)
		保健室におけるⅡ期の児童・生徒への対応では、7年生以上は自立をメインに考えている。5・6年生はそこまで求められない。受け止めたうえで、これは自分でできるよねと中学生的な部分を重ねるようにしている。	教員 (中)
		中学校籍の養護教諭は指導的な面が多い。小学校籍の養護教諭はまず手当だが、中学校籍の養護教諭は手当をしながらも指導している。すごいと思う。	教員 (小)
		小学生が保健室に求めるニーズと、中学生が保健室に求めるニーズはかなり違う。やはり保健室は二つあり、別々の方がやりやすい。	教員 (小)
	円滑な移行による安定した学校生活	通常の中学校にいた時は、養護教諭として生徒の小学校時代を知りたいと思っていた。小学校の養護教諭に電話することはあったが、小学校の担任と話すことはなかった。情報が伝わるのに時間がかかっていた。今はすぐに聞ける。	教員 (中)
特別支援教育の取組状況	特別支援教育など配慮しなければいけない子供については、7～9年生で顕著になるが、1～6年生の時にそのシグナルが隠れている。小中一貫教育校の場合、早いうちに気付いて専門機関につなぐことができると思う。	教員 (小)	

教員アンケートから、安定した学校生活と、特にⅡ期における接続での養護教諭と2つの保健室の果たす役割が大きいと考える。

■検証部会でのご意見

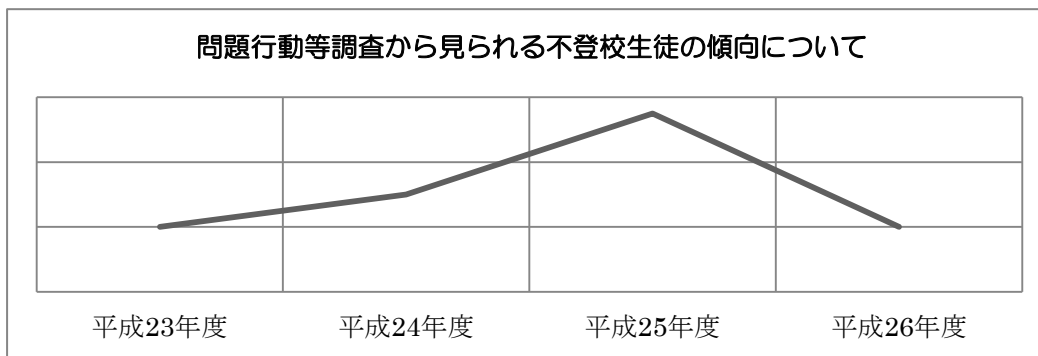
小学生と中学生では保健室に求めるニーズが異なり、小中学校の養護教諭が作成する保健日誌からもその違いが見られる。特に中学生の場合は養護教諭に相談に来るケースが多いことから、保健室を別々し、安心して相談できる環境が整えられていると考えられる。

■考 察

- ・教員のヒアリングから、小学校と中学校における保健室の果たす役割や養護教諭の関わり方に違いが見られ、児童・生徒の発達段階に応じた対応や指導が求められていると考える。
- ・大泉桜学園では、小学校と中学校の養護教諭が直接相談したり連携を図ったりすることができることから、配慮を要する児童・生徒への早期対応が可能になっている。

(5) 不登校生徒について

大泉桜学園では、9年間で3期に分け各段階におけるねらいや重点を明確にして生活指導に取り組んでいる。また、小中学校に養護教諭とスクールカウンセラーを各1名配置し、相互の連絡・連携をとりながら安定した学校生活をおくることができるよう配慮している。



平成23年度の問題行動等調査の結果を基準とし、平成26年度までの4年間の傾向をグラフにしたものである。

平成23年度から平成24年度、平成25年度へと不登校生徒数の上昇傾向が見られる。また、平成25年度から平成26年度は下降傾向が表れている。

■ 検証部会でのご意見

■ 考 察

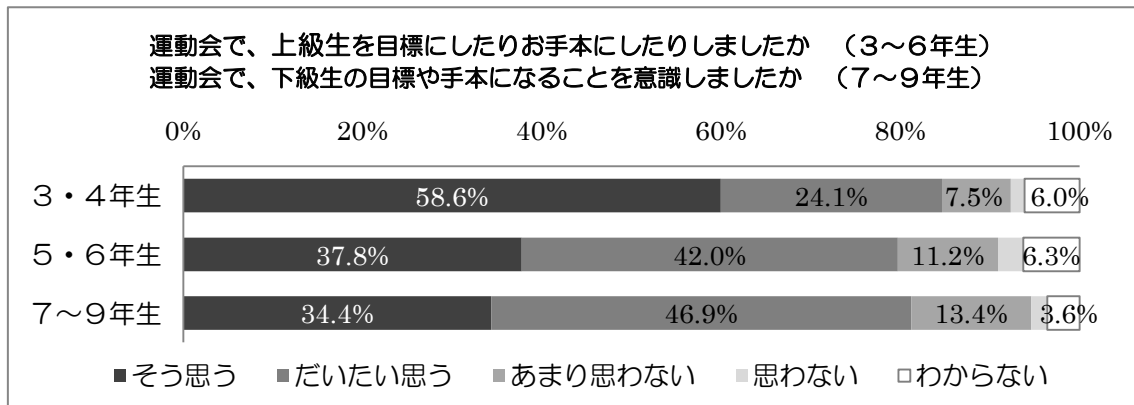
- 平成23年度から平成25年度にかけて不登校生徒の増加傾向がみられるが、その原因は様々であり、複合的な要因から発生している事例も考えられる。
- 大泉桜学園は、児童・生徒指導において、小中学校の教員間において情報共有を迅速に行い、組織的に対応できるよう取り組んでいる。そのため、不登校の未然防止や不登校となって表れている問題等に対して、スクールソーシャルワーカーや地域の民生委員・児童委員その他関係機関とも連携を図りながら、解決に向けて取り組んでいる事例もある。
- 平成25年度から平成26年度にかけて不登校生徒の減少傾向が表れているが、今後も、小中学校の教員が児童・生徒一人一人の状況をよく把握し、関係機関と連携も図りながら、継続して組織的に対応することが必要である。

3 幅広い異年齢集団活動による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができる

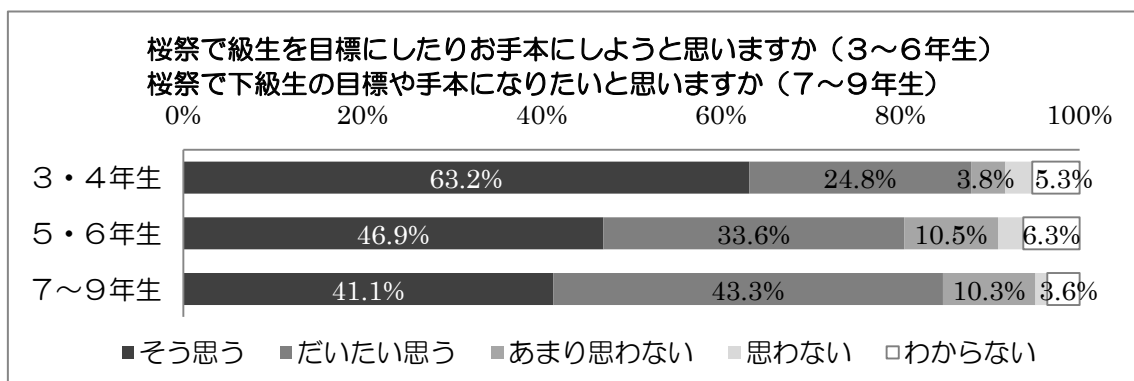
(1) 合同学校行事 ～運動会・桜祭・入学式・卒業式～

大泉桜学園では、1年生から9年生までの児童・生徒が運動会や桜祭、儀式的行事としての入学式や卒業式を合同で行っている。

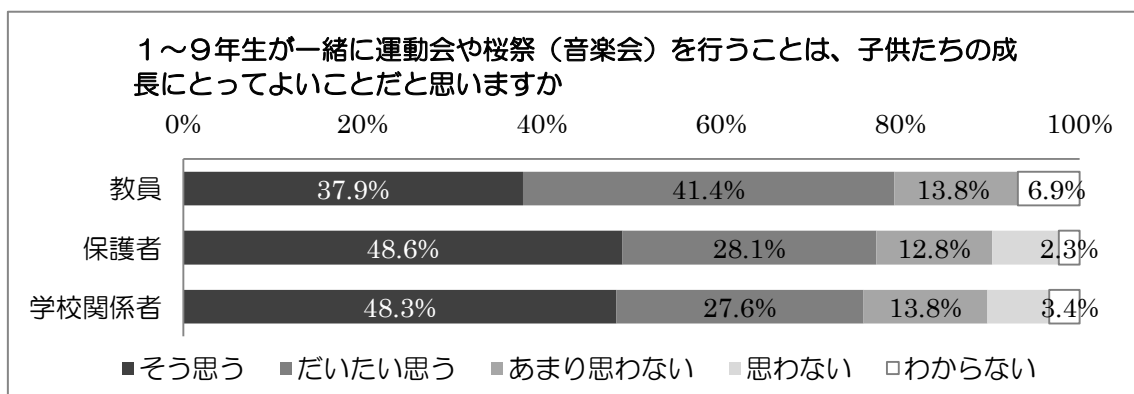
<検証アンケートより>



3・4年生の肯定的な回答は82.7%であり、このうち「そう思う」と答えた割合は58.6%である。また、5・6年生の肯定的な回答は79.8%、7年生から9年生までの肯定的な回答は81.3%である。

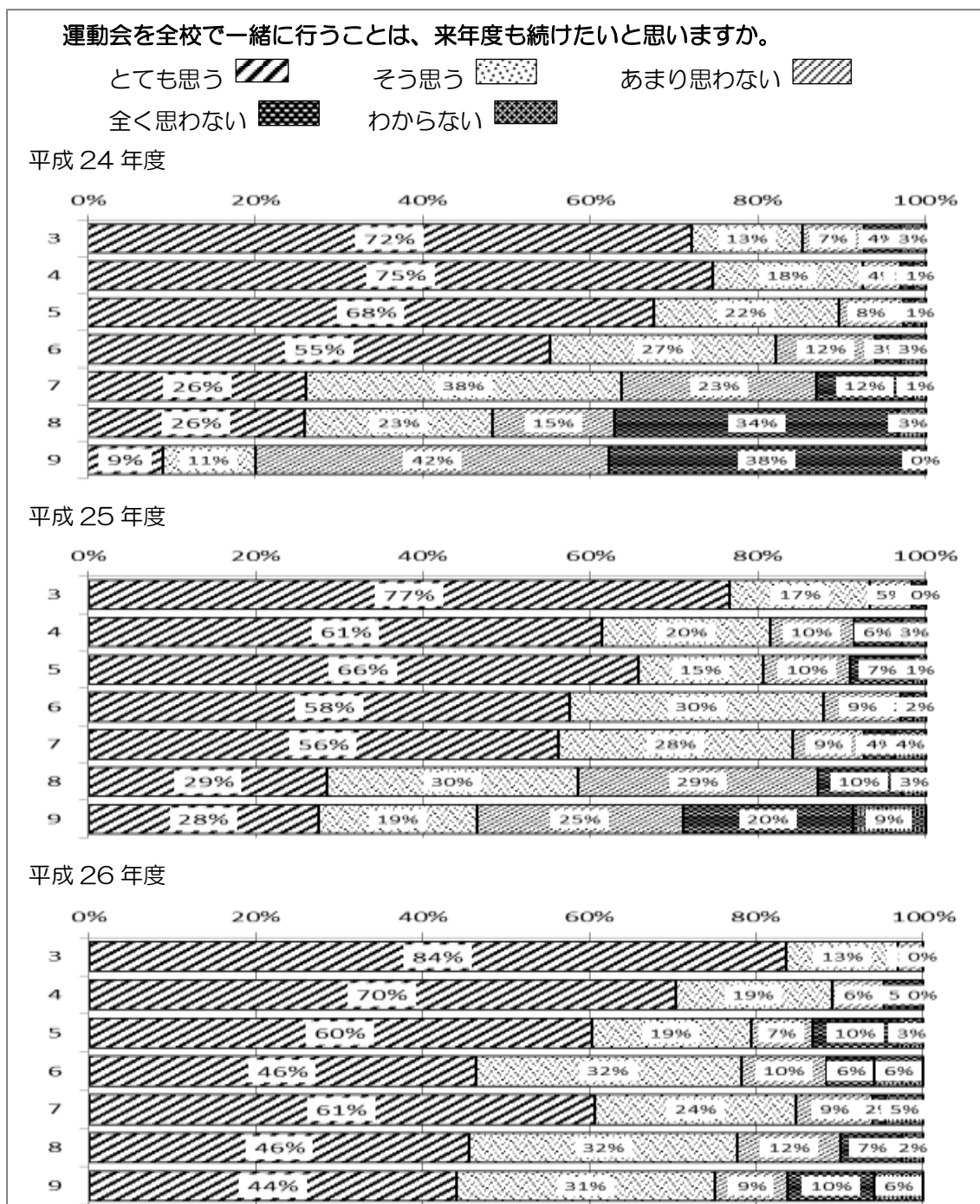


3・4年生の肯定的な回答は88%であり、このうち「そう思う」と答えた割合は、63.2%である。また、5・6年生の肯定的な回答は80.5%、7年生から9年生までの肯定的な回答は84.4%である。



教員の肯定的な回答は79.3%、保護者肯定的な回答は77%、学校関係者の肯定的な回答は76.4%である。このうち、保護者及び学校関係者で「そう思う」と答えた割合が約48%を占めている。一方で、「あまり思わない」「思わない」と回答した割合が約20%を占めている。

<学校評価アンケートより>



平成24年度の肯定的な回答では、3年生から6年生までが80%を超えているのに対して、7年生は64%、8年生は49%と低い。また9年生の肯定的な回答が20%であるのに対して、「そう思わない」「思わない」を合わせると80%に達している。

平成25年度の肯定的な回答では、3年生から6年生までが80%を超えているのに対して、7年生は84%、8年生は59%である。また9年生の肯定的な回答が47%

であるのに対して「そう思わない」「思わない」を合わせて45%である。

平成26年度の肯定的な回答では、3年生から6年生までが80%前後であるのに対して、7年生は85%、8年生は78%である。また9年生の肯定的な回答が75%、「そう思わない」「思わない」と回答した割合を合わせると19%である。

<教員アンケート（平成26年度）から>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
幅広い異年齢集団による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができる。	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導状況	4年生のリーダー性については、4年生でも委員会の委員長や縦割りの班長が意外にできる。しかも4年生は5・6年生よりやりたがるので、教師もやりやすい。	教員 (小)
		4-3-2の区分について、4年生は伸びているが5~7年生はもう少し耕さないといけないと思う。5年生で区切るというのもある。	教員 (小)
		4年生で力を付けるという指導計画をつくるので4年生で力は付くが、6年生ではだめなのか、4年生でそういう力を付けさせるのがいいことなかは分からない。4年生に6年生と同じものを求めてはいけませんが、やりようだと思った。4年生の委員会活動は1年間だけなので、ちょっと短い気がした。	教員 (小)
		昨年度は5年生を担当していて、5~7年生で飯盒炊さんの縦割り班を組んだ。本当は5~7年生の取組をたくさん行いたかった。保護者から5年生はⅡ期では何で縦割りが少ないのかという意見も出ていた。7年生でリーダーを経験できる機会を多く用意できたのはいいことだった。	教員 (中)
		5~7年生の指導が昨年度と今年度のテーマである。7年生の防災リーダーを始めたが、昨年度始めたばかりなので、まだ手応えは分からない。ただ、飯盒炊さんは7年生がリーダーでもできることが分かった。期のリーダーとなる機会をしっかりと用意しないとけない。	教員 (小)
		9年間を通しての成長については、リーダーを3回経験するチャンスがある。大きな課題になったのはⅡ期である。1~4年生は小回りがきくので結束が強くうまくいった。8・9年生も大丈夫だった。逆にⅡ期は、5・6年生と7年生になってしまった。	教員 (小)
		Ⅱ期の効果として、小学校から中学校への段差を緩やかにする効果は大きい。しかし、成長過程に必要なステップという面もある。どこにねらいをもつかによって違うと思う。	教員 (中)
	たてわり活動や合同行事等の異年齢集団活動を通じた豊かな人間性や社会性育成に向けた指導状況	桜祭や運動会では、子供たちにとっては、いかに自分の力を発揮するかが大事である。上級生にとっては、例えば1年生のトイレのお世話をしたり、自分が運動会や桜祭での運営に役立っていたりするという感覚をもつことができる。下級生にとっては、これから自分がどうなっていくかのイメージをもちやすい。	教員 (中)
		桜祭での9年生の歌は圧巻であり、子供たちも引き込まれている。大変なのはそこに至るまでの教員の葛藤である。学芸会はなくなったが、学芸会をやりたいという気持ちが保護者にも教員にもある。ホールを借りているので舞台上立った高揚感が全然違う。小学校は舞台上で失敗しないように時間をかけて練習するが、中学校は放課後の練習がメインで時間をかけられない。	教員 (小)

教員アンケートから、4年生の成長や合同行事の実施において、児童・生徒の成長が見られるなど肯定的な回答が見られる。一方で7年生の指導において課題である考える教員もいる。

<児童生徒会役員ヒアリングより>

- ・運動会では小学生も中学生を全力で応援して、学校が一丸となっていると実感できる。
- ・小学生の競技を見て、これやったなあと懐かしくなる。部活動の後輩の応援とかが楽しい。
- ・せっかく小中一貫教育校なのだから、2年生と7年生の合同競技とかがあった方がいい。

<学校関係者ヒアリングより>

- ・小中一貫教育校になって行事は賑やかになって明るくなったと思う。桜祭も人数が少なくてかわいそうだったので小中一貫教育校になってよかった。特に小学生にとってはよいと思う。中学生にはあまり影響がないのではないかと思う。
- ・開校前の運動会では、人数が少ないから走ってばかりで大変だった。
- ・運動会は小中一貫教育校になって、中学生が活動する分、余裕ができたような気がする。桜祭はまだ行ったことがないが、すごくいいと聞いている。劇がなくなったのは残念だが音楽だけでもいい。開校前の中学生だけの時は、広いホールががらんとして寂しかった。舞台には20人位で、声も届かなかった。
- ・運動会や桜祭は思った以上のものだった。こういう行事なのかとびっくりした。大きい子が小さい子の面倒をよくみている。これなんだと思った。今までの学校行事では、子供たちは自分のことで精一杯だった。
- ・運動会については、小さな子から自分より大きな子までと一緒にいる。大きい子が小さい子の面倒をみている。6年生が面倒をみるより、7年生が面倒をみる方がいいと思った。6年生ではあそこまでできないのではないかと思う。7年生は中学生としては一番下だが、よく面倒をみている。
- ・保護者としては、卒業式は別の方がいい。6年生と9年生が一緒に卒業式だと泣く場面がない。親は感動して泣きたい。入学式は、ほほえましくて受け入れられる。
- ・卒業式については、小学校の卒業式が中学校の卒業式に近付いているのではないかと感じた。上に引っ張られているようなイメージがある。

<保護者アンケート自由意見より>

運動会

- ・1～9年合同の実施ということで、事前は、児童生徒は自分の競技外の時間が多くなるため、集中力が保てないのではないかと感じていましたが、上級生は運営への参画や下級生の面倒を見ることなど、充実した時間が過ごせているのではないかと感じました。一方、下級生も、上級生の様子を、関心を持ってみているようで大変よかったですと思います。
- ・小中一貫校教育の一端がよく見て取れる運動会だとも感じました。上級生が1年生をトイシに連れて行ったり、競技の一切を取り仕切ったりする姿には、微笑ましくもあり頼もしくもありました。7・8・9年生の組体操は、1年生の息子の目にとっても眩しく映った様子で、「お兄さん達カッコよかったね。タワー高かったね。」と興奮気味に感想を言っていました。
- ・上級生の演技を見つめる下級生の目が真剣でした。あこがれて成長していきんだらうと思います。上級生が下級生のお世話をがんばってやってくれていました。小中一貫のいいところだとも感じます。
- ・9学年全部でやるからなのか、時間短縮のためなのか、各学年の種目がないのが残念です。高学年が70mや80m走って…。せめて100mにしてほしいです。西校舎と東校舎で日にちを分けて、運動会をやってもらいたいなとも感じました。
- ・中学生も一緒のためか、参加競技も少なく、まだ1年生なのでこれくらいか…とも感じますが、例えば他の学校だと、最高学年の6年生がすごく活躍して、さすが6年生とか、そういうのがなかったり、もし自分が中学生の親だったら、少し物足りなさを感じるだろうなあとも感じました。

桜祭

- 子どもたちに“本物”を知ってもらおうということの意味が、直接見て、聴くことでよくわかりました。また、一貫校であることの利点がとても表れているように感じました。1～9学年それぞれの子どもの成長が感じられ、それぞれの年齢らしさが出ていたと思います。息子は1年生ですが、初めて“緊張”という気持ちを体験し、他学年の合奏・合唱を“すごい”と憧れの気持ちで見えていたようでした。
- 運動会と桜祭は小中一貫の醍醐味だと思っています。どの学年も素晴らしくて感動しました。小学生も中学生の歌を聞けるようになって（小学生が先に帰るのではなく）、長い間座席にいることはとても大変なことだと思いましたが、先生の歌や全校合唱、吹奏楽などで工夫をされていたので、とてもよかったです。
- 1年生の盛り上がりは、上級生の演奏にのっていると一目瞭然ですね。帰宅後は「9年生カッコ良かった」「6年生のすごかった」「金色の大きい楽器やってみたい」と子供は大興奮。親子で楽しい1日でした。
- 1年生にして9年生の合唱が聴けること、中学生の吹奏楽の演奏が聴けること、このことで1年生の世界も広がったのではないかと思います。子供の1人1人の向上のためにも、小中一貫校であることが、とても良いことだと感じました。
- 9年生は立派でしたね。一番上の学年として、憧れの存在になれたのではないのでしょうか。吹奏楽部の演奏で1年生が踊っていたり、9年生の歌で小学生が感動しているのを見て、小中一貫校の良さがよくわかりました。
- 小・中一緒だと、9年生まで見るのは子供達には長丁場だったのでは？とかわいそうに少し思いました。朝起きてから帰り3時半下校まで…長いですね。
- 鑑賞の様子についてですが、やはり低学年にとっては午後まで持たせるのは負担なためか、おしゃべりが目立っていました。

■ 検証部会でのご意見

小中合同の卒業式など他の小中学校にはい大泉桜学園独自の学校行事があり、児童・生徒にも浸透してきたように思われる。また、4年生から5年生へと校舎が変わる「虹を渡ろう」会や、6年生によるクラブ活動発表会など、工夫を凝らした取り組みが見られる。

■ 考 察

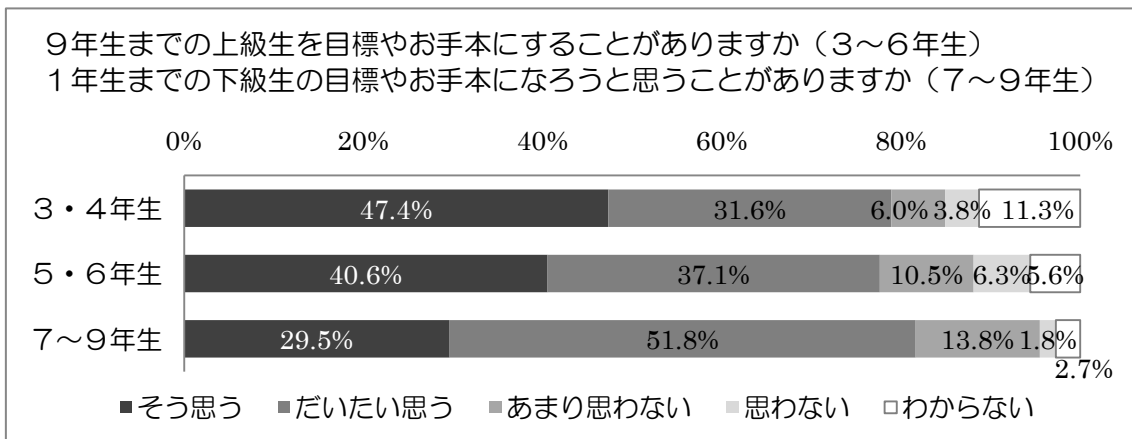
- 検証アンケートから、運動会や桜祭等の合同学校行事において、3・4年生では上級生をお手本に、5年生から9年生では下級生の目標や手本になることを意識している割合が非常に高いことが分かる。また教員・保護者・学校関係者において、合同学校行事が子供たちの成長にとってよいと考えている割合が80%前後に達している。教員や保護者へのアンケートや学校関係者へのヒアリングでは、上級生の行動が下級生の手本になっていることや、9年間の成長をイメージすることができるなども寄せられており、これまでの取組の成果として考えられる。
- 学校評価アンケートでは、平成24年度では7年生以上において、肯定的な回答が少なく、9年生では80%が小中合同運動会に対して違和感をもっていることが読み取れる。しかしながら平成25年度、平成26年度と回数を重ねることで7年生以上において肯定的な回答が増え、小中合同運動会が定着しつつあると考える。
- 保護者へのアンケートや学校関係者ヒアリングから、小中合同の学校行事に対して肯定的な回答が見られる中で、課題や要望も見られる。全学年参加の行事を実施

するための学校行事の精選や児童生徒の参加種目が少なくなったことなどがあげられている。検証アンケートの中で「子供たちの成長にとってよいとは」の問いに対して、合わせて約2割が「あまり思わない」「思わない」と回答していることと関連していると考えられる。検証アンケートやヒアリング等の結果から異年齢集団活動への理解が深まっていると考えられ、児童・生徒の実態を踏まえ、引き続き工夫・改善を図る必要がある。

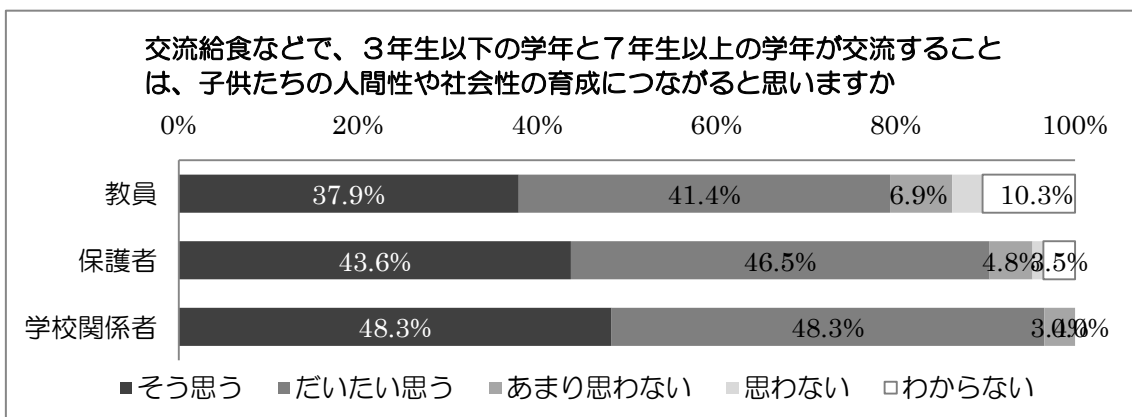
(2) 異学年交流・たてわり活動

I期では4年生、II期では7年生、III期では9年生がそれぞれの期のリーダーとして、たてわり遠足や飯盒炊爨等を実施している。このほかに交流給食や部活動、児童生徒会活動に取り組んでいる。

<検証アンケート(平成26年度)より>

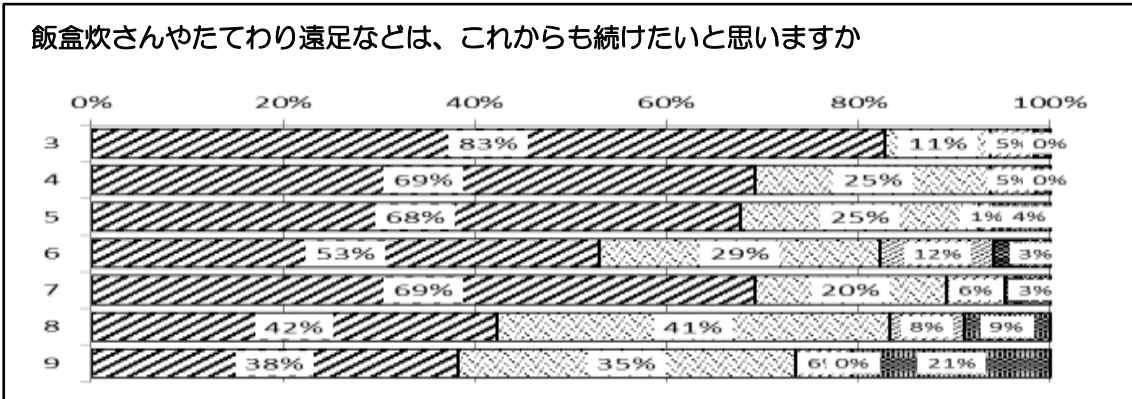


3・4年生の肯定的な回答は79%であり、このうち「そう思う」と答えた割合は47.4%である。また、5・6年生の肯定的な回答は77.7%、7年生から9年生までの肯定的な回答は81.3%である。



教員の肯定的な回答は79.3%、保護者肯定的な回答は90.1%、学校関係者の肯定的な回答は96.6%である。

<学校評価アンケート>



全学年とも肯定的な回答は70%を超えている。このうち飯盒炊さんでリーダーとなる7年生は89%であり、このうち「そう思う」と答えた割合は69%である。一方、たてわり遠足のリーダーとなる4年生は89%であり、このうち「そう思う」と答えた割合は69%である。

<教員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
幅広い異年齢集団による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができる。	たてわり活動や合同行事等の異年齢集団活動を通じた豊かな人間性や社会性育成に向けた指導状況	東校舎が12時10分から、西校舎は12時30分から給食なので、交流給食は西校舎に合わせて12時30分からとなる。低学年は準備に時間がかかるのでちょうどよい。	教員(中)
		交流給食は東西の校舎にいる児童・生徒が顔見知りになり、声をかけるようになるきっかけになっており、そのことが学校行事などにつながっている。小学校の児童が中学校の生徒と会うことで中学校のことが分かるようになり、中学校が身近になる。	教員(中)
		交流給食は微笑ましい。子供たちは中学生が来るとうれしそうで、誰かのお兄さんやお姉さんが必ず紹介される。中学生も小学生に喜ばれてうれしそうである。	教員(小)

教員ヒアリングから、交流給食を通して児童・生徒との関係を深める役割を担っていると考える。

<児童生徒会役員ヒアリングより>

- ・7年生から入学した者としての印象は、小中一貫教育校なのに他の学年との交流が少ないと思った。校舎が同じでも後輩を誰も知らないで声がかけれない。交流は運動会や桜祭ぐらいしかない。部活動や児童生徒会の活動で少し知り合えた。部活動は7年生以上がメインなので、5・6年生はクラブ活動に集中した方がいいと思った。児童生徒会役員会は5・6年生の意見も聞けていい。
- ・ふれあい給食はPRすべきだと思う。回数を増やしたい。できるだけ離れた学年と一緒に給食を食べたい。

<学校関係者ヒアリングより>

・小さい子と何を話していいのかわからないから交流給食は緊張すると子供は言っていた。早く給食が終わってくれと思って食べていたと言っていたが、だからよくないということではないと思う。その緊張する気持ちや小さい子と何を話そうかという体験が大事だと思う。

■ 検証部会でのご意見

リーダー性を発揮する学年では、異学年との交流で肯定的な回答が高く、意欲的に取り組んでいる様子が見られる。一方で6年生においては肯定的な回答が減少していることから、工夫が必要であると考えられる。

■ 考 察

- ・ 3・4年生では上級生をお手本に、5年生から9年生では下級生の目標や手本になることを意識している割合が高い。また、飯盒炊さんやたてわり活動でリーダーとなる7年生及び4年生において、肯定的な回答の割合が高い。
- ・ 3年生以下と7年生以上との交流について、教員・保護者・学校関係者においても肯定的な回答が高く、異学年交流への理解とともに大泉桜学園の特色ある活動として受け入れられている。
- ・ 一方、児童生徒会役員ヒアリングから、7年生から入学した生徒から、小中一貫教育校なのに他の学年との交流が少ないことや、声をかけられる後輩がないとの回答が見られる。児童・生徒の現状を踏まえ、特に7年生から入学してくる生徒に対する工夫・改善が必要である。

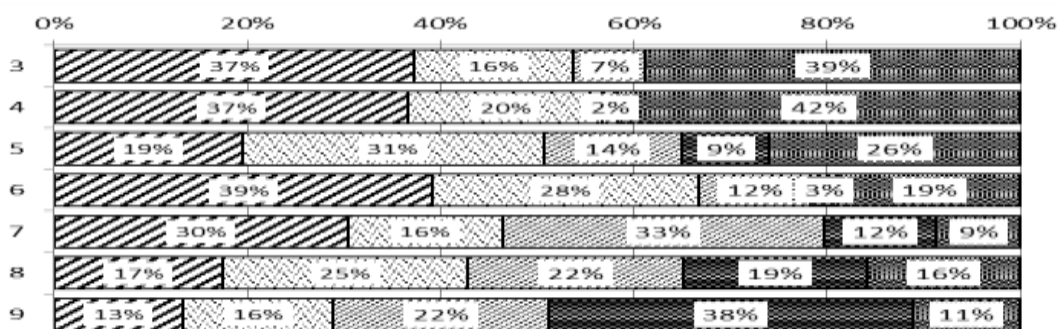
(3) 5・6年生からの部活動

大泉桜学園では、運動部7、文化部3のすべての部活動で、5年生からの入部を認めている。

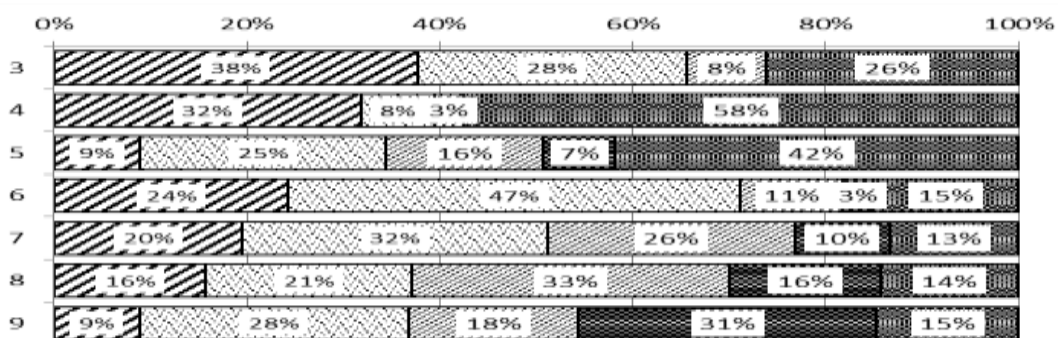
<学校評価アンケートより>

5・6年生が部活動に入ること、部活動が活発になったと思いますか

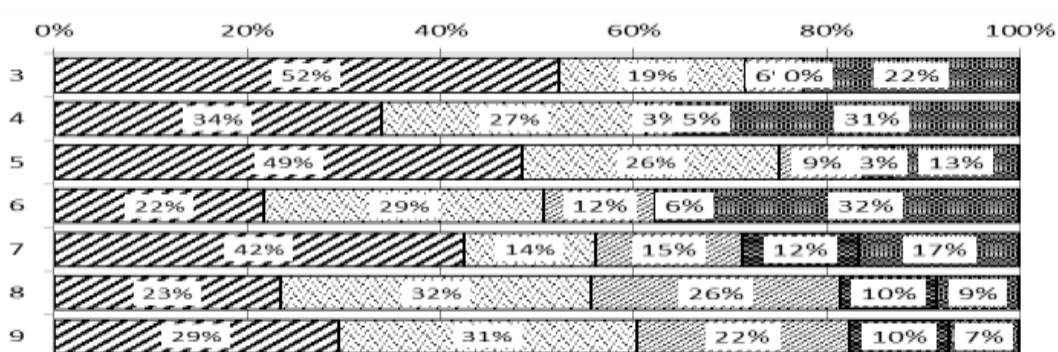
平成24年度



平成25年度



平成26年度



部活動の中心となる7年生から9年生までの回答では、平成24年度の肯定的な回答は7・8年生では40%、9年生では約30%である。平成26年度では、7年生から9年生まで55%前後まで増加した。

一方、部活動へ参加できる5・6年生において、平成24年度の肯定的な回答では5年生が50%、6年生が67%である。平成26年度では5年生が34%、6年生が63%である。平成26年度では5年生が75%、6年生が51%である。

<児童生徒会役員ヒアリングより>

- ・6年生から部活動でバドミントンをやっている。1年間やっただけでも、次の年に7年生から入ってきた人との差が大きかった。小学校からやっていると伸びると思う。
- ・6年で部活動に入れたのは大きかった。先輩となじめる。
- ・敬語を使わない言葉づかいについては、高校に行った時に困るのではないかと思う。

■ 検証部会でのご意見

小中一貫教育校になり部活動の数が増え、中学校教員のほかに小学校教員も顧問として児童・生徒の部活動に指導に当たるようになった。また、小学校5年生から部活動に参加できるようになり、特に5年生の参加が増えている。中学生との関わりが増え、将来の中学生像をイメージする上で効果をあげていると考えられる。

■ 考 察

- ・検証アンケートから、7年生から9年生までにおいて、平成24年度から平成26年度26年度にかけて肯定的な意見が増えている。また、部活動へ参加できる5・6年生において、年度により異なるが、概ね5から6割前後の児童が肯定的な回答をしていると考える。
- ・全ての5・6年生が部活動に参加していないため、希望する部活動に参加している児童と参加していない児童とでは、部活動の参加に対する受け止め方も異なる。また、部活動の中心となる7・8・9年生においても、体力や技術面で差があることや目的意識の違いが考えられる。
- ・一方で部活動に参加している児童へのヒアリングから、小学校から参加することで技術が伸びたことへの実感や中学生の先輩との人間関係を築く上で有効であったとの回答もみられる。

4 小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる

(1) 学校組織と校務分掌

大泉桜学園は、校長を1名のもと、副校長を3名配置し「教務・研究」、「生活指導・進路学習」、「特別活動」の担当に分けている。さらに小中教員の主幹教諭または主任教諭が各校務分掌等の主任または責任者として配置している。また各期の教員について、Ⅰ期は小学校教員、Ⅱ期は小中学校教員、Ⅲ期は中学校教員が担当し、指導に当たっている。さらに、用務、施設管理、給食、事務、様々な会議等を一元化し、一つの学校組織として運営している。

<教員ヒアリングから>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる。	学校組織、兼発令、校務分掌、組織体制、用務、施設管理、給食、事務、諸会議の運営等の小中一貫教育校としての運営状況	特別活動部は大泉学園桜中学校にはなく、生活指導部の中に特別活動が含まれていた。小学校は特別活動の分掌がないとできないのでつくってもらった。それを理解してもらうのに時間がかかった。	教員 (小)
		小学校籍、中学校籍の教務主任が連携することについて、小学校籍の教務主任は中学校の進路指導については分からないし、中学校籍の教務主任は小学校の学級担任制のことが分からないので、連携は必要である。校庭を使う時や共通の行事、学校公開などの時間割の調整は密にする必要がある。	教員 (小)
		5・6年生と7年生の教員の連携について、1・2年目は溶け合わない。行事を回すことで精一杯だった。ここ年はⅡ期で食事会も行くようになった。職員室の席も近くなり話し合っている。今の7・8年生は自分が指導した生徒なので、生徒をはさんで話ができる。子供が淋しそうにしていたら声かけられるし、7・8年生の教員に伝えられる。保護者にも長く見ていたので話しかけられる。7年生の臨海学校に付いて行ってもいいくらいである。	教員 (小)
		校長や副校長とのやりとりについて、最初は大変だった。副校長が3人いて、教員間での分掌はあったものの、誰に印をもらえばいいか分からなかった。今は統括する副校長にまずもっていくようにしている。	教員 (中)
		意思決定の在り方については、毎朝打合わせをされていて、起案文書で処理すること以外に課題があった場合には、校長からの指示で副校長が動いている。起案文書は副校長も全員見て校長に提出している。	教員 (小)
		副校長の役割分担について、どの副校長の担当なのか分からない場合は、今では副校長のどなたかの机においておくと、担当の教員にまわしてもらえる。	教員 (中)
		副校長3人の体制について、教務、進路指導、生活指導と副校長の担当が分かれていても、小学校籍の副校長に生活指導の相談をしても副校長によって回答が違ふこともあり戸惑う。最終的には副校長同士で相談してもらったりした。各期の担当はあるが、Ⅱ期の副校長はどれだけ小学校や中学校のことを理解できるかが課題である。	教員 (中)

	小・中学校の相互協力の関係の構築	小中一貫教育校になって仕事が増えたということはあまりないが、連絡調整は増えた。6年分の調整よりは9年分の調整の方が大変である。全員で集まりにくいとか話が伝わりにくいという面はある。東校舎と西校舎で違う時間が流れている感じはある。	教員(中)
		最初の年は、職員会議の提案の前に一人一人の教員に話をして調整をしていた。今は小学校と中学校の間に線がある感じが無い。こちらの思いが分かってもらえる。特別活動を計画する際に楽しかった。開校当時の苦しみを知っているから仲もいい。	教員(小)
小学校から中学校へ進学する際の段差(学習内容や指導方法の違い)を緩やかなものにし、円滑な移行が図られる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。	全学年における標準服の着用の効果	これからは異動してきた教員への説明が必要だと思う。落とし物や忘れ物をした時にどうするのか、標準服のルールはどうするか、それぞれの学校の指導の考えがある。教員ごとに言っていることが違うといけない部分については、年度当初の説明によって少なくなるのが一般の中学校である。大泉桜学園ではそれができていない。文書にして足並みをそろえて共通理解する機会が必要である。	教員(中)
		標準服というものへの感覚は違う。小学校では服装について指導してきた経験がない。足並みを揃えなければいけないのだろうが、小学校だから何着てもいいじゃないかと保護者に言われると、学校で決めているのだと言える教員もいるが、そうだなと思ってしまう教員もいる。最初のうちは、始業式などの儀式的行事ではこうしてきてくださいと保護者にメールを出していたが、最近は言わなくても標準服に準じた服装で登校するようになった。	教員(小)

教員アンケートから、小中学校の教員がこれまでの違いをよく理解したうえで、様々な調整や工夫をすることで円滑な学校運営を可能にしていると考えられる。

■ 検証部会でのご意見

小学生と中学生では保健室に求めるニーズが異なり、小中学校の養護教諭が作成する保健日誌からもその違いが見られる。特に中学生の場合は養護教諭に相談に来るケースが多いことから、保健室を別々し安心して相談できる環境が整えられていると考えられる。

■ 考 察

- ・教職員ヒアリングから、開校当初は小学校籍の教員と中学校籍の教員との考え方や意見の相違等、いわゆる文化の違いや、校内での意思決定においても課題が見られた。開校して4年が経過し、一つ一つの課題の解決や小中学校籍の教員が連携・話し合い・協働で取り組むことを通して、現在の小中一貫教育校としての学校運営を築き上げることができたと考える。
- ・今後、教職員の異動により、これまでの経過や小中一貫教育校に初めて勤務する教職員が現れてくる。このことについて工夫や改善を図るとともに、学校教育法の一部改正による義務教育学校の設置に向けた問題点を整理して課題の改善に取り組む必要がある。

(2) 小中合同の校内研究

研究推進委員会を中心に全職員が研究に関わり、小中合同の校内研究を推進している。

<教員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかなものにし、円滑な移行が図られる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。	習熟度に応じた指導や補充的な学習などの子に応じた指導等の充実に向けた教員間の協力の状況	算数の教科書の問題が難しかったので、それに入る前にもう少しやさしい問題をワンクッション入れてみた。数字を少し変えるだけでもやさしさが変わる。児童はすごく変わったように思う。算数の担当教員と数学の担当教員が月1回、話し合いの機会をもっている。	教員 (中)
		算数から数学へと変わる時のフォローの仕方として、7年生になった時に毎回繰り返して振返りの問題や課題を出すことで、生徒に定着するように工夫している。宿題は5分や10分でもできるようなものを出している。正解しなくてもいいから、考えてやってみるプロセスが大切だと伝えている。	教員 (中)
		4～6年生で算数をみていると、まったく分からない子供をつくってはいけないと思う。7～9年生が見えるので、その後に数学がまったく分からないという状況が見えてしまう。そのため、早いうちから放課後に集めて指導している。	教員 (小)
		小学校籍の教員から学んだものは、きめ細かさや教材準備、掲示物もきれいであることである。小学校の学習内容との重複も授業で意識するようになった。	教員 (中)
小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる。	小・中学校教員の相互協力関係の構築	小学校籍と中学校籍の教員が連携することについて、9年間を通して考えられることが大事なので、小学校6年間というゴールと中学校3年間のゴールではなく、1本のゴールになったので考えやすくなった。	教員 (小)
		中学校籍の教員は他の教員に授業を見せないし、数学の教員は国語の教員に意見を言えないという不文律がある。研究主任として、研究での連携と進め方については、そこを崩すのが大変だった。最初は小学校が中学校の、中学校が小学校のというように互いの授業を見合うところからスタートした。ここ最近、中学校籍の教員が教員同士で話ができるようになったので、ようやく教科ごとのグループをつくった。でも教科ごとにやるとそれぞれで視点がずれていくので、桜ベシックや桜スタンダードをつくろうとしている。	教員 (中)
		意見交換は、特に若い教員にとって研修的な意義が高い。今後、異動してからも生きると思う。	教員 (中)

教員ヒアリングから、小中教員が合同校内研究に取り組むことにより、9年間を見通した学習指導を考えるようになり、授業方法の工夫や改善につながっていると考える。

■検証部会でのご意見

小・中教員が、児童・生徒のための教育活動を考え、そのために合同で研究に取り組んできたことが大泉桜学園の教育をつくっていると考えられる。

■ 考 察

- ・小中教員が9年間を見通した教育活動を意識するようになり、各教科において小学校と中学校との学習内容を確認するとともに、指導方法や工夫・改善に対して意欲的に取り組むようになったと考える。
- ・校内研究において、小中相互の授業参観や小中教員による教科ごとのグループをつくるなど、小中教員が連携して大泉桜学園の児童・生徒のための研究への取組が進められている。また、各教科のグループに複数の教員がいることで、特に経験年数の浅い教員へのOJTを補完でき、教員の資質や授業力の向上へつながっている。

(3) 給食調理の体制

栄養士2名が配置し、民間委託業者が給食調理を担当している。給食調理は同じ給食室で同時に行っている。

<教職員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる。	小・中学校の教員の相互協力関係の構築	朝のミーティングは給食調理員全員10名で行う。味見は2名の栄養士で行う。	職員 (中)
		給食の時は全学級を栄養士2名で回り、声をかけたりする。全員とはいかなくても、食の細かい子供などには目が向く。	職員 (中)
		5年生の給食の時間が短くなることについて、5年生には短くなったという意識がないので、準備に時間がかかって食べる時間が少なくなってしまふ。5・6年生だけでももう少し給食の時間が長いと思う。教室移動があるとさらに短くなってしまふ。各階に給食配膳室があり給食を取りに行くのだが、西校舎からは遠い。遅い時は5年生に届けに行くこともある。	職員 (中)
施設整備における効果と課題	職員室、東校舎・西校舎、渡り廊下、校庭、ランチルーム、多目的室、体育館、学習室、保健室、相談室、個別学習室、学校	栄養指導の面で配慮していることとして、小学校だけだった時は6年生までで終わりであった。小中一貫教育校になり、子供の育ちがつながって9年間をみられるようになった。例えば、あの子供は嫌いなものが食べられるようになったということが分かる。また、西校舎に移って食が細くなったということも見て取れる。これは給食の時間が西校舎に行くとは短くなったからかと思う。食を通じて子供たちの変化や育ちを見ることができる。声かけができる。	職員 (中)
		大泉桜学園の給食室は他校に比べて釜が多く、6釜ある。このため、カレーや麻婆豆腐など辛さや刺激があるものは、学年で味を分けて提供している。食器は1～4年と5～9年で分けている。	職員 (中)

図書館 ほか	低学年と高学年で釜を分けている。和食は低学年の方に抵抗がある。小中一貫教育校になるとゴールは中学生である。栄養価の基準は中学生の方が脂質が多いので、量だけを変えても適正な栄養価比率とならない。同じ学校なので献立は同じと考えると、量だけで調節することが難しい。給食費は小学校の3段階と中学校で4段階になっている。中学校籍の教員からは品数を増やして欲しいとの要望はあるが、品数を増やすと一人当たりの量が少なくなり、低学年の子供たちは給食を適量で配ることが難しくなっており大変である。学年によって食材を切る大きさを変えるなどの配慮をしている。ポウルに入っているものを分けて配るのは、低学年の子供にとっては難しいので、配りやすいものを考えている。	職員 (小)
	小学校と中学校を一緒にして給食を出す上での工夫や取組について、1年生から9年生までの中で大きなくくりがある。小学生は1・2年生、3・4年生、5・6年生で分かれており、量の調整もしている。	職員 (中)
	給食の出し方にしても、例えば冷やしうどんであれば、麺、野菜、つゆとなるが、低学年だと麺と野菜を一緒に出している。5・6年生は給食の時間が短いえ、専科の授業で東校舎の端にある理科室などからの移動が長く大変である。	職員 (小)
	味付けや献立の配慮について、家庭では子供向けという配慮はない。献立を特に子供向けということで意識することはないが、例えば木の芽和えというようなメニューの場合は、1年生から4年生がいない時に出すといった配慮はしている。	職員 (中)
	小学校と中学校で別々の時は献立を別々に考えることができたので、一品多くしたり、小学生がいない時には中学校だけで考えることができたりした。小中一貫教育校になった時に食器の大きさを変えた。1年生から4年生までのものとそれ以上の学年用で大きさを揃えた。また食器の数も9種類に増やした。これは区内で一番多いのではないか。	職員 (中)
	1年生と9年生ではパンの大きさや給食の量が全く違う。交流給食では、普段は残してしまう子供も下の子供がいるとがんばって食べている姿がある。	職員 (中)

教職員のアンケートから、同じ施設を活用して給食を調理しているが、発達段階により給食のメニューや栄養価、配膳の準備等において、きめ細やかな工夫・改善を図る必要がある。

■検証部会でのご意見

区内初の小中一貫教育として、新たな課題に対して工夫・改善を図りながら取り組んでいる。発達段階によって栄養価や献立、調理において工夫をしながら、栄養士や調理師がよく連携して取り組んでいると考えられる。

■考 察

- ・年間の子供たちの育ちが見えるようになり、食を通じて子供一人一人の変化が分かるようになり、給食指導や食育への取組につながっていると考える。
- ・教職員ヒアリングから、発達段階に応じて1年生から6年生までを3段階、7年生から9年生を含めて4段階に分け、栄養面や量、味等の調整を行うなど、様々な工夫が必要となる。現在大泉桜学園に2名の栄養士が配置されているが、このことにより、発達段階に応じたきめ細やかな給食を提供できていると考える。

(4) 事務職員の協力体制

都費事務職員2名、区費事務職員2名（非常勤1名・臨時2名）の計5名体制で、一元化して事務に当たっている。

<教職員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果をあげることができる。	学校組織、兼務発令、校務分掌、組織体制、施設管理、給食、事務、諸会議の運営等の小中一貫教育校としての運営状況	都費の事務職員が2名、区の非常勤職員が1名、臨時職員が2名の計5名体制である。日常的な管理については難しさをあまり感じていない。最初は広すぎてどうかと思ったが、事務主事二人で相談しながらできるのでいい。	職員 (小)
	学期の財務運営の状況	小中一貫教育校の事務について、予算は準備段階で困った。教育委員会に質問状を作って提出したが、区では予算が小学校費と中学校費が分かれている。品川区の場合は教育費として一つになっている。職員室で使うものはどちらで買うのかという問題が出てきた。今は、消耗品は中学校費、芝生など小学校限定のものは小学校費で出している。	職員 (小)
		1・2年目で大変だったことは、区で小中一貫教育校の認知度が低く、予算配当が変なところに入っていて執行できないことがあった。また、備品台帳を一つにしてもらえなかったので、何度も区にお願いした。	職員 (小)
		学校納付金について、1年生でデータを登録すれば9年生までゆうちょ銀行で引き落としされるシステムにしたが、7年生の保護者は改めて審査があるのに就学援助の申請を忘れて、未納になってしまうケースがいくつかある。	職員 (小)
		就学援助は中学校に入る時に申請し直さなければならないが、同じ学校なので自動継続と思われる方がいるのかもしれない。教育委員会事務局で対応してもらいたい。	職員 (小)
	職員室、東校舎・西校舎、渡り廊下、校庭、ランチルーム、多目的室、体育館、学習室、保健室、相談室、個別学習室、学校図書館ほか	工事費用は小学校と中学校で分けて配当されるが、分けて執行するのは難しい。サッカーゴールを塗装するのは小学校と中学校で同時にやるが、領収書を分けると分割予算ということになり法律に抵触するので、小学校か中学校かどちらか一方の予算にその都度割り振って処理している。	職員 (中)

職員のヒアリングから、小中一貫教育校としての実態に合った予算の執行や学校経営を行うための改善が必要である。

■ 検証部会でのご意見

学校予算や備品・施設・設備の管理等、これまでにない様々な課題が明らかになってきた。学学校運営に関わる課題について解決を図ることが必要であるとする。

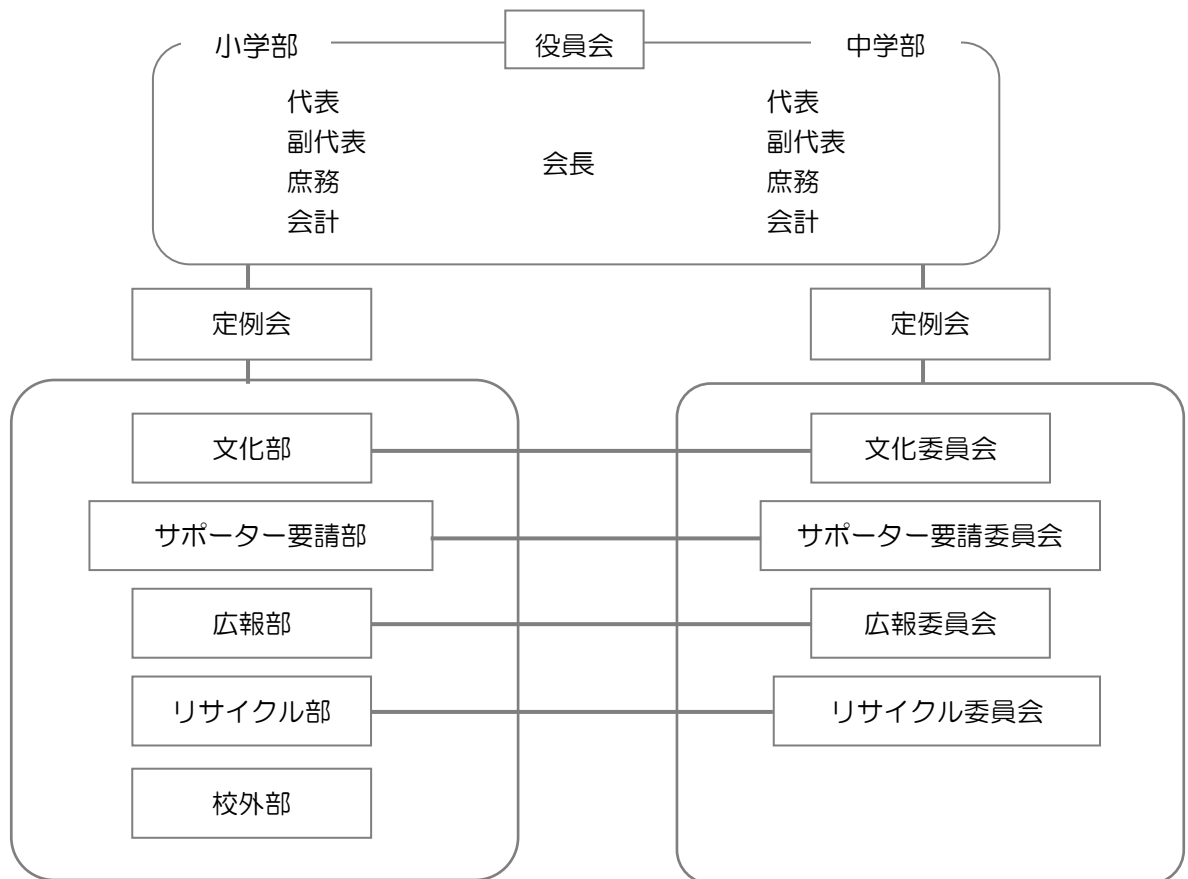
■ 考 察

- ・ 事務職員の協力体制が整えられ、学校事務が円滑に進められていると考える。
一方、予算執行や学校経理において、事務処理上、区費が小学校費と中学校費に分かれているため、円滑な予算・決算の執行において弊害となっている。
- ・ 今後、学校教育法の一部改正により義務教育学校の設置が可能になることから、適正な学校事務を執行するための条件整備を行う必要がある。

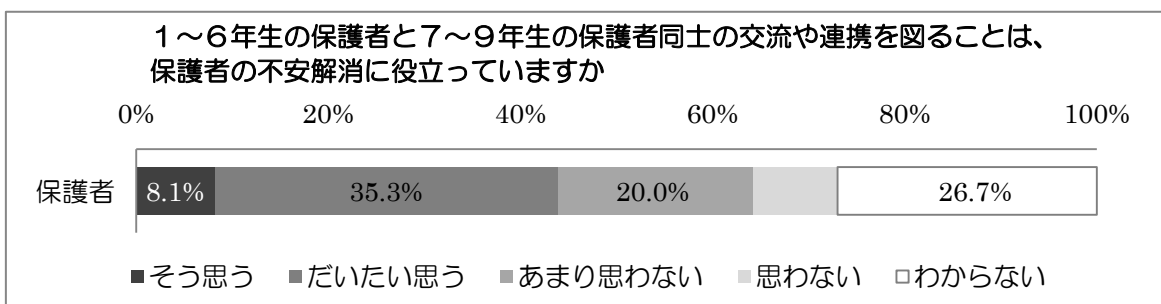
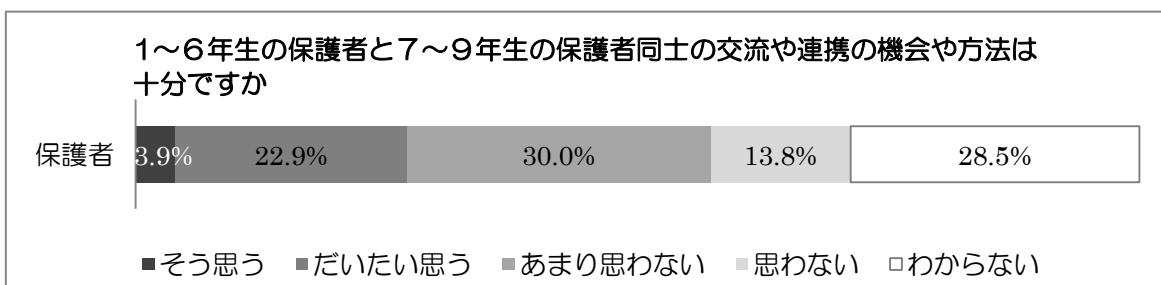
5 地域社会と連携した特色ある学校づくりを推進し、魅力ある学校とすることによって保護者や地域社会からの信頼を得られる。その結果、学校と地域社会の活性化につながる

(1) P T A組織における小中連携

大泉桜学園の開校に伴い、P T A組織についても小・中学校の組織を一体化し「桜連絡会」として設置した。桜連絡会の組織図は、以下のとおりである。



<検証アンケートより（保護者）>



<学校関係者ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
地域社会と連携した特色ある学校づくりを推進し、魅力ある学校とすることによって、保護者や地域社会からの信頼を得られる。その結果、学校と地域社会の活性化を図ることができる	P T A 組織や学校評議員会の状況	保護者会組織については、今年初めて小中合同の役員会をやった。概ねうまくいっている。桜祭のような行事にも小中学校の保護者が一緒に関わっている。	学校関係者
		大泉桜学園の保護者が団結しているため、他の小学校から入った保護者は、同じ小学校同士となりやすい。桜連絡会の役員になったことで知り合いが増えた。中学生の保護者はなかなか学校には来ない面がある。	学校関係者
		保護者会の活動に理解ある方と理解のない方との差が広がっているのは、小中一貫教育校も同じである。	学校関係者
		桜連絡会は、開校当時は小学部、中学部は別々に活動していた。合同役員会はあったが、その他は別だった。徐々に距離が縮まり、今は全て一緒に活動している。行事の役割分担もできないことを補い合っている。クラス委員は小中一貫教育校になり負担が増えたと思う。特に中学部は、以前はあまり部会の活動がなかったが、小学部に合わせて活動することが増えた。会議の時間帯も合わなかったが、今年から小学部に合わせて午前中に一緒にやっている。中学生の保護者も来てくれている。小学校のP T Aでやっていたことを中学校の保護者も一緒に活動するので大変になったかもしれない。まだ当たり前にはなっていない。	学校関係者
		開校当時のP T A活動は、小学校と中学校で組織も会費も違っていたので、大変だったようだ。小学校と中学校の先生が違うように、小学校と中学校の親も違うのかもしれない。集まる時間も小学校は午前中だが、中学校は夕方とか土曜日とかであった。	学校関係者
		小中一貫教育校しか知らない保護者が多くなってきた。今の学校の状態が当たり前と思っている。地域も最初は戸惑っていた。	学校関係者

学校関係者ヒアリングから、大泉桜学園の小学部P T Aと中学部P T Aが徐々に関係を深めて、一緒に話し合ったり活動したりする機会が増えてきていることがわかる。

■検証部会でのご意見

一般的には、小学校と中学校のP T A役員同士が話す機会もほとんどない。他校と比べると、大泉桜学園ではP T Aの連携がはるかにとれていると思う。

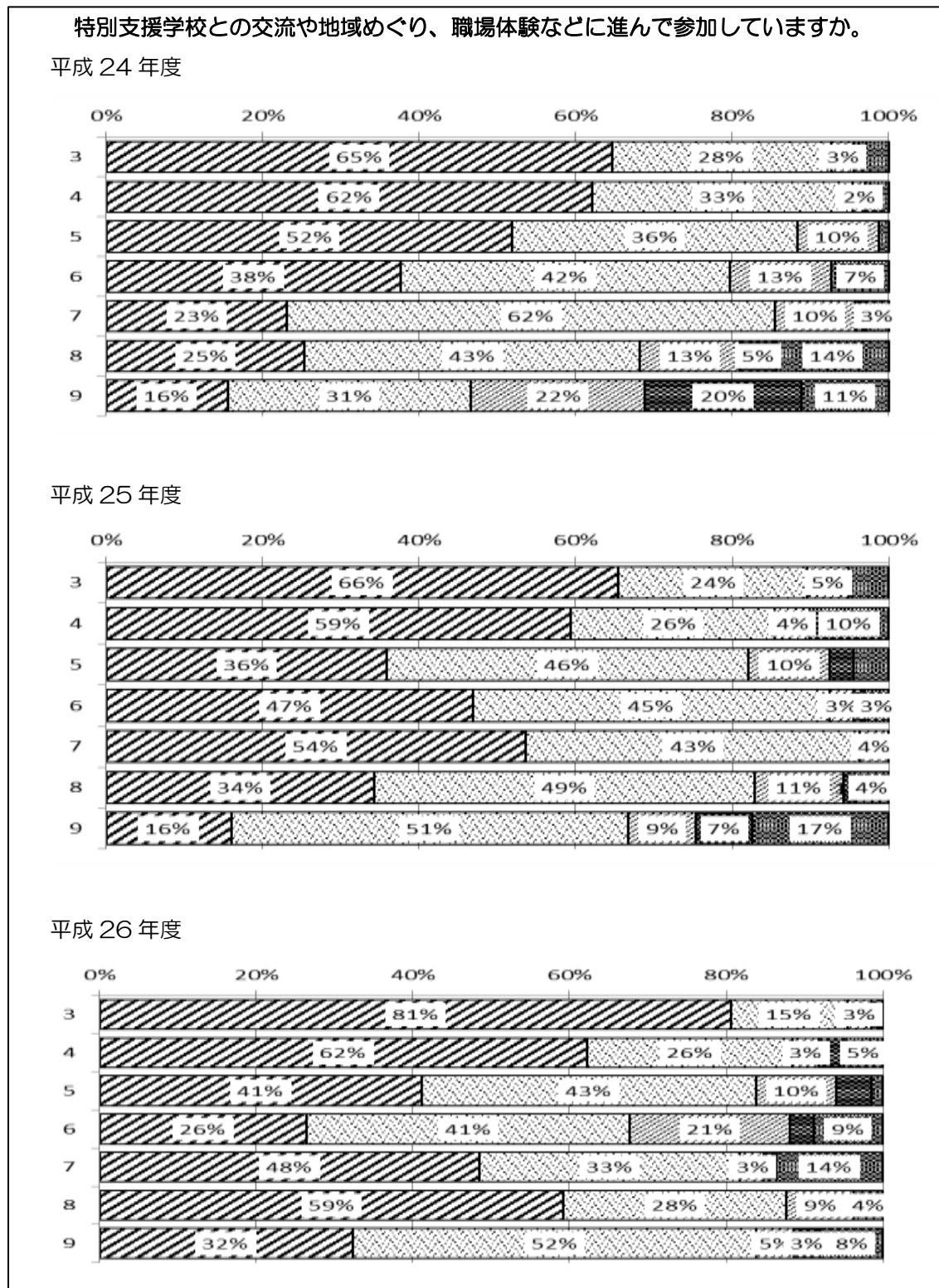
■考 察

- ・小中一貫教育校開校に伴って小・中学校のP T A組織も一体化したことで、1～6年生の保護者と7～9年生の保護者が一緒に活動する機会が増えてきた。
- ・4割以上の保護者が、1～6年生の保護者と7～9年生の保護者が交流・連携することが保護者の不安解消に役立つと考えているが、交流・連携の機会が十分と考えている保護者は3割弱にとどまる。
- ・開校前に比べて、保護者同士の交流が増えてきてはいるものの、さらなる交流・連携を望む保護者が多いことがうかがえる。

(2) 小中一貫教育校と地域との連携

大泉桜学園では、隣接する特別支援学校との交流や職場体験などを通して、子供たちが地域と交流する機会を積極的に設けている。また、町会のお祭りに吹奏楽部が演奏するなど地域の行事にも関わっている。

<学校評価アンケートより（児童生徒対象）>



<学校関係者ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
地域社会と連携した特色ある学校づくりを推進し、魅力ある学校とすることによって、保護者や地域社会からの信頼を得られる。その結果、学校と地域社会の活性化を図ることができる	地域社会との連携と小中一貫教育校による学校・家庭・地域社会（避難拠点、青少年育成など）との連携状況	開校に向けていろいろな意見はあったが、今はない。いい方向に動いていると思う。児童放課後居場所づくり（ひろば）事業では、開校前の小学校の時には雨天時に体育館が遊び場所として使えたが、小中一貫教育校になって部活動で使うようになったので、使えなくなった。最初は子供たちが、自分たちの体育館なのになぜ使えないのかと言っていたが、今は最初から使えないと思っているので何も言わない。	学校関係者
		ひろば事業のさくらっ子まつりでは、280人くらいの子供が参加している。中学生が手伝いに来てくれている。机の準備などもすごく速い。	学校関係者
		中学生にも来てもらいたいが、ひろば事業に中学生が来ることはほとんどない。	学校関係者
		再登校の時にはひろばで待機してもいいと言っているが、子供たちはあまり来ない。子供たちはひろばや学童クラブ以外の遊び方を覚えると来なくなる。	学校関係者
		この地域には町会が三つあり、以前は事実上、小学校と関わる町会と中学校と関わる町会で何となく分かれていた面があった。避難拠点運営連絡会も小中学校で別々にあり、どちらに関わればいいのかという状況があった。今は学校が一つなので避難拠点運営連絡会も一つになり、関わりやすい。	学校関係者
		地域の町会として学校を支援しようという姿勢でやってきた。開校前は避難拠点運営連絡会など、小学校、中学校はそれぞれ3町会で分担していた面があった。小中一貫教育校になり、一緒にやるようになった。	学校関係者
		小中一貫教育校が開校して、3町会で顔を合わせることが多くなった。大泉桜学園のおかげで町会同士の風通しもよくなった。学校が一緒になって地域も一緒になった。小中一貫教育校になったおかげで、地域としてもスムーズになった。大泉桜学園はモデル校であるので、学校から要望があれば協力する。	学校関係者
		練馬区からも大泉桜学園の子供を巻き込んだ防災活動をしてほしいという話がある。避難拠点運営連絡会の活動も会場は学校である。学校とのやり取りもスムーズになった。	学校関係者
		町会としては、一つの学校となった方が関わりやすい。	学校関係者
		先週、東町会の運動会があって桜学園の1～4年生にもチラシを配って何人も来てくれた。ラジオ体操をやったが、みんなきちんとやるので驚いた。学校の先生が一生懸命教えているからではないか。いい子ばかりである。	学校関係者
町会役員は高齢の人が多。町会の祭りなどに大泉桜学園の子供たちがさらに参加してくれるといい。	学校関係者		

学校関係者ヒアリングでは、小中一貫教育校の開校を機に、大泉桜学園の地域にある3つの町会が顔を合わせる機会が増えて地域がまとまったり、地域と学校とのやりとりがスムーズになったりしたとのいう声が聞かれた。

■ 検証部会でのご意見

- ・ 学校関係者がアンケートに回答する場合には、回答する気持ちの中にこうなってほしい、という期待があると思う。実際の内容はわからないが、期待を込めて肯定的な回答をする人が多いのではないか。
- ・ 聞き取り調査のなかで、学校関係者から「開校当時の中学校の先生が、特に運動会についてぼやいていた。先生方からは小中一貫校になって良かったという話は聞かない」というような否定的な発言があったことが気になる。こういった意見があるということとは真摯に受けとめたい。

■ 考 察

- ・ 特別支援学校との交流や地域めぐり、職場体験など地域との関わりに積極的に参加していると答える児童生徒の割合は、年によって異なるが、多くの学年でおおむね8～9割程度である。24年度は学年があがるについて、積極的に参加している生徒の割合が減っていたが、25年度、26年度と8・9年生で積極的に参加していると答える割合が増加してきた。高学年における地域交流に対する積極性の向上が、小中一貫教育に起因するものかどうかについて明確な論拠はないが、地域からは好意的に評価されている。
- ・ 小中一貫教育校になったことで、地域に対する窓口が一本化され、地域にある3町会の連携も進んだととらえることができる。

6 施設整備における効果と課題

大泉桜学園の開校にあたって

大泉学園桜小学校・大泉学園桜中学校の既存校舎を活用することを基本とし、小中一貫教育校として必要な機能を整備するため、以下のような改修を実施した。

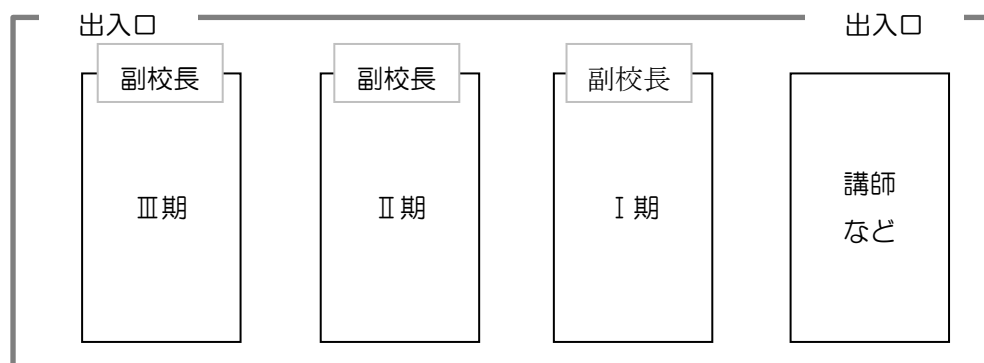
【主な改修内容】

- 東校舎と西校舎の接続部分を改修し、通路として使用できるようにした。
- 東校舎（旧小学校舎）に1～4年生、西校舎（旧中学校舎）に5～9年生の普通教室を確保するため、西校舎にあった学習室、会議室、視聴覚室、生徒会室等を改修し、西校舎の普通教室を7教室増やした。
- 西校舎にあった第2理科室および金工室を改修し、小中合同の職員室とした。
- 小・中学校校庭の境界部分をメイン通路として舗装し、接道部に新たな校門を設置した。
- 小中学生の共有スペースとしてランチルームを設置した。

(1) 職員室が小中合同であること

小中一貫教育校開校に伴い、職員室を1つにし、職員室の座席は、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の教員ごとにした。期の机のまとまりごとに、それぞれの期を担当する副校長の席が設けられている。

廊 下



校 庭

<教職員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
施設整備における効果と課題	職員室、東校舎・西校舎、渡り廊下、校庭、ランチルーム、多目的室、プール、体育館、学習室、保健室、相談室、個別学習室、学校図書館ほか	開校前の準備では、何時間話しても何も決まらない会議があった。開校前には「もっとフレキシブルになればいいのに」と思っていたが、職員室が一緒になって、だから譲れないのかとやっと分かった。例えば、定期考査の採点が大変と聞いてはいても、開校前には何とかなるのではないかと思っていた。職員室が一緒になって目の当りにすると、大量のテストを次の授業までに採点しなければならぬのはやはり大変であり、成績にも関わってくるのが分かってきた。職員室が一緒になって初めて分かることが多い。	教員(小)
		小中一貫教育校になって6年生担当教員の隣の席は7年生担当の教員だったので、やりとりできたのはよかった。「小学校の教員はこんなことしてるの。」などという会話が合った。中学校籍の教員の動きを学ぶいいチャンスだった。開校前は、実態を知らないから想像で話していて、楽しそうとしているのではないかなどと悪口になってしまっていた。大きな声で指導するとか、なんでこんな指導するのだろうかと思っていたが、中学生たちは声変わりもあって大きな声を出さないと教員の声が通らないとか、毅然とした態度で臨まないとなめられてしまうとか、様々な意図があったことが分かってくる。互いに配慮して仕事ができきたと思う。	教員(小)
		職員室が同じなので意思疎通が進んでうまくいった。職員室が分かれていたらうまくはいかなかった。扉一枚でもしきりがあると敷居は高い。	教員(中)
		職員室が一つというのは最大のメリットであり、自分のキャリアにとってもすごくプラスである(再掲)。	教員(中)

教職員ヒアリングでは、多くの教職員から、職員室を小中合同にしたことで情報共有や相互理解が進んだとの意見があった。

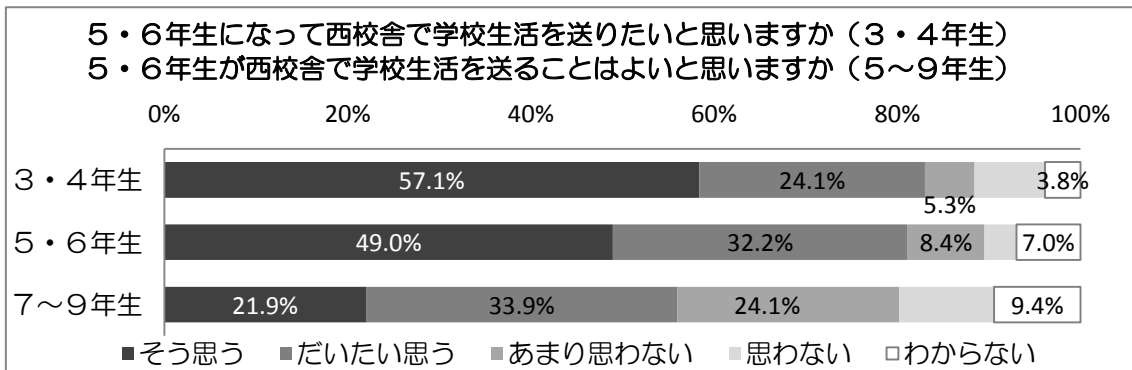
■考 察

- ・職員室を1つにすることで、日常的な小学校・中学校の教員の動きも自然に理解することができ、合同職員室の意義は大きい。
- ・職員室内の座席についても、小学校と中学校を分けることなく、5～7年生をひとつのかたまりとして座席を配置したことで、小学校籍と中学校籍の教員の相互理解と交流が円滑に進んだ。

(2) 校舎のゾーニング（東校舎・西校舎）

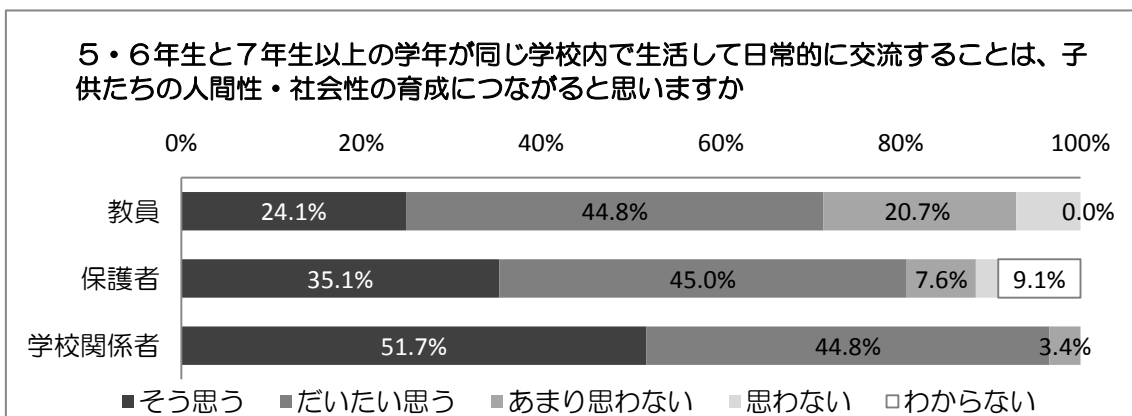
大泉桜学園では、9年間をⅠ期（1～4年）、Ⅱ期（5～7年）、Ⅲ期（8・9年）の区切りで捉える考え方から、1～4年生が東校舎、5～9年生が西校舎で生活するよう校舎のゾーニングを設定している。

<検証アンケートより>



3年・4年生で81.2%、5・6年生で81.2%は肯定的な回答である。一方、7年生から9年生における肯定的な回答は55.8%である。

<検証アンケートより>



教員のうち68.8%、保護者のうち80.1%、学校関係者のうち96.5%が肯定的な回答である。また、教員、保護者、学校関係者の順に肯定的な回答が高くなる傾向が見られる。

<教員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
施設整備における効果と課題	東校舎・西校舎	今の5年生は4年生の時と比べて意識が違う。4年生の校舎での卒業式となる「虹を渡ろう」という行事をやっているが、5年生には西校舎に行ったのだからしっかりやるという意識が芽生えている。宿題をやってくるようになったり、持ち物をきちんと持ってくるようになった	教員 (小)
		中1ギャップへの対応として、大泉桜学園では5・6年生をパワーアップさせている。大泉桜学園では4年生から5年生への段差が一番大きいと思う。	教員 (小)

		7年生は5・6年生がいることで先輩としての振る舞いがある。情操教育という面では異学年交流の効果は大きい。下の学年に引っ張られるのも悪いことではない。上の学年に引っ張られて大人びる弊害の方が大きい。後輩がいて、5・6年生が見ているのでちょっと背伸びしている。いい方向で捉えている。	教員 (中)
		小学校と中学校では規格が違うものがあり、階段の高さや跳び箱の高さも違っている。この学校は二つの学校がつながっているので、施設面ではゆとりがある。また、教員たちは小中学校で仲がいいので、道具や場所などの融通が利き、互いに貸し合ったりできる。	教員 (小)
		小学校と中学校では階段の1段の高さや黒板の高さも違う。自分は小学校担当なので、中学校のことは口出しできなかったが、いざできると5・6年生には黒板が高い位置にありすぎて使えなかった。結局縦がより長いものに作り変えた。西体育館も小学生の保護者が連れてくる4・5歳の子供たちが階段を上るのに危険だったため、スロープを作った。また、小さい子供だと手が挟まってしまうため、西校舎の昇降口のドアにゴムを貼った。	教員 (小)

<児童生徒会役員ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
施設整備における効果と課題	東校舎・西校舎	他の学校だと中学1年生が一番下の学年だが、7年生だと5・6年生がいるので緊張感をもったりお手本にならなければと思ったりする。	児童生徒
		5・6年生で西校舎に行けるのは嬉しかった。	児童生徒
		西校舎は、階段の高さも違って大人になった感じだった。	児童生徒
		5・6年生で中学校の先生と、7～9年生で小学校の先生と話すことは結構ある。	児童生徒
		小学校でお世話になった先生に「頑張っているね」と言われるとうれしい。すれ違った時に軽いおしゃべりができるのはうれしい。	児童生徒

教員ヒアリングと児童生徒会役員ヒアリングから、1～4年生と5～9年生で校舎を分けたことにより、5年生に進級するときの意識が大きく変わったことがわかる。また、5・6年生が同じ校舎にいて、7年生の意識にも変化が出てきていることがうかがえる。

■考 察

- ・9年間の3つの区切りにあわせて、1～4年生を東校舎、5～9年生を西校舎としたことは、4年生の成長を大きく促す効果があった。一方で、Ⅱ期とⅢ期の区切りについては、施設整備のゾーニングが設定されていないため、7年生にⅡ期のリーダーとしての役割を与えるために工夫を重ねている。施設整備におけるゾーニングには子供たちの成長にとって大きな意味がある。

(3) 異学年交流スペース（ランチルーム）

小中一貫教育校開校にあたり、異学年交流スペースとして、ランチルームを新設した。このランチルームでは、小・中学生が同じテーブルで給食を食べる「交流給食」や、地域の方を招いて児童と一緒に給食を食べる「ふれあい給食」が行われている。また、小中学校籍の教員が合同で校内研究を行う会場としても利用されている。



ランチルームのふれあい給食



小中合同の校内研究会

■考 察

- ・ランチルームは、異学年交流および地域交流の場所として有効に活用されている。小・中学校教員の研修や打合せの場としても活用されている。

(4) 体育施設（体育館、プール、校庭）

大泉桜学園は、既存の小学校・中学校の施設を活用しており、体育館、プールは小中学校それぞれに整備されている。4－3－2の区分に関わらず、授業では、開校前と同じように、1～6年生は旧小学校のプール・体育館、7～9年生は旧中学校のプール・体育館を利用している。

校庭は小・中学校の校庭の境界をなくして一体化したため、通常の2倍の広さがあり、低学年と高学年が同じ時間帯に校庭を使用することができる。

<体育館の利用状況>

<プールの利用状況>

<校庭の利用状況>

(5) 特別教室

1～4年生は東校舎、5～7年生は西校舎というゾーニングを設定したが、特別教室については、使用する器具等の関係で、5・6年生も東校舎の理科室・音楽室で授業を受けている。1階にしか接続通路が設置されていないため、教室移動に時間がかかってしまうという問題点がある。

開校前の中学校には、理科室が2つ整備されていたが、開校時に職員室に改修して理科室を一つにしたところ、異なる学年が使うたびに実験用具を片付けなければならず、理科の実験準備に時間がかかるという課題が明らかになった。26年度に再度改修工事を行い、理科室を2つに増やした。

※体育施設、特別教室については、従来の小・中学校施設をそのまま利用している。他自治体の小中一貫教育校では、小中共同としている場合が多いため、今後、比較検証するための調査を実施する。

7 小中一貫教育の課題を解決し推進するための先導的な役割、通学区域と学校選択制度、教育委員会の役割

(1) 通学区域制度の特例

大泉桜学園では、1～6年生の通学区域と7～9年生の通学区域が異なっている。小学校は大泉学園緑小学校、中学校は大泉桜学園が指定されている地域では、7年生から大泉桜学園に入学することが想定されている。7年生から小中一貫教育校に入学することに不安を感じるという児童・保護者の声もあり、大泉桜学園では、大泉学園緑小学校の掲示板で取組を紹介するなどして不安感の緩和に努めている。

また、小中一貫教育校の開校にあたり、小中一貫教育校の小学校の通学区域外居住者のうち、小中一貫教育校の中学校の通学区域内居住者については、希望により小中一貫教育校の小学校に入学できることとした。

<特例対象地域>

大泉学園町6丁目12番～31番

※通学区域の小学校は大泉学園緑小学校だが、通学区域の中学校は大泉学園桜中学校となるので、希望により大泉学園桜小学校へ入学することができる。

<通学区域特例による小学校入学者>

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
特例対象者数	20名	34名	23名	34名	26名	44名
特例での入学者数	0名	1名	0名	1名	0名	3名
入学者数計	78名	62名	61名	75名	70名	70名

■考 察

- ・現在までのところ特例の利用者はあまりいなかったが、27年度に初めて複数の児童が特例により小学校から大泉桜学園に入学した。

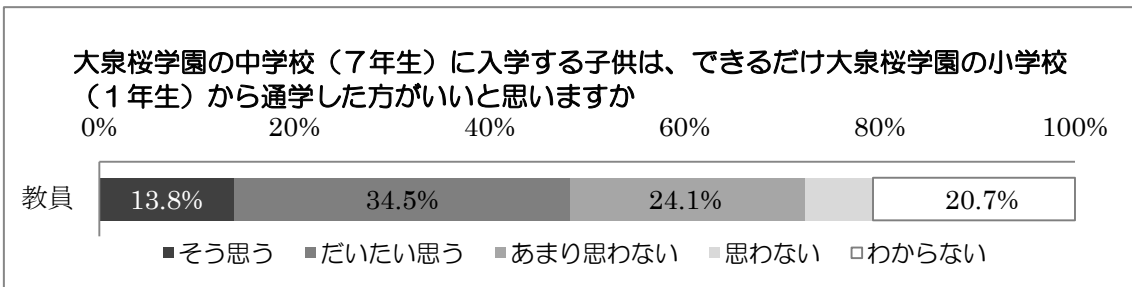
(2) 学校選択制度と小中一貫教育校

練馬区では、通学区域制度を基本としながら、中学校入学時に一定の制限のもとで通学区域外の学校を選択できる「中学校選択制度」を導入している。大泉桜学園においても、中学校選択制度を利用して大泉学園桜小学校から他の区立中学校を選択したり、通学区域外の小学校から大泉桜学園を選択して7年生から入学することができる。

<学区域居住児童数における中学校入学率>

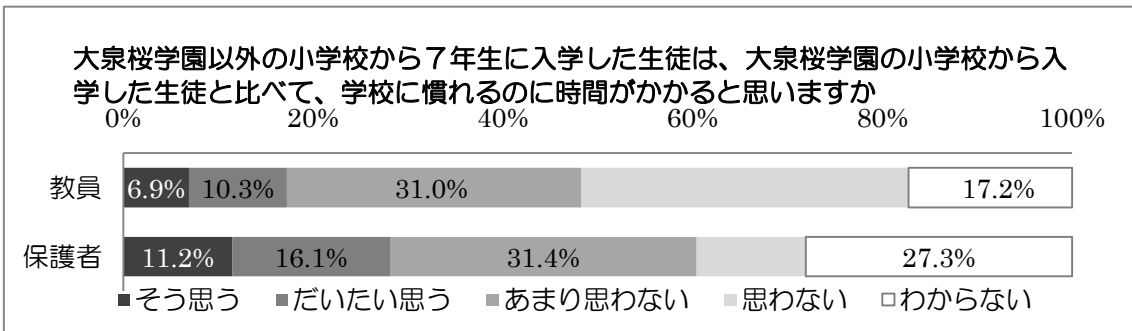
	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
入学者数	52名	78名	70名	84名	75名	75名
学区域居住児童数	117名	122名	109名	128名	117名	105名
入学率	44%	64%	64%	66%	64%	71%
練馬区全体入学率	74%	76%	74%	77%	77%	

<検証アンケートより>



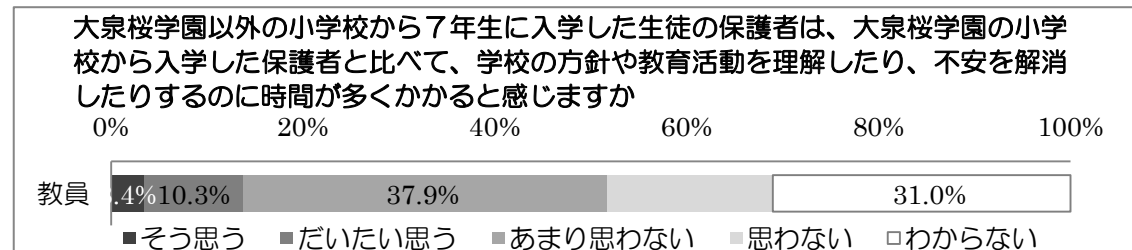
肯定的な回答は48.3%で約半数である。一方、「あまり思わない」「思わない」を合わせて約3割を占めている。

<検証アンケートより>



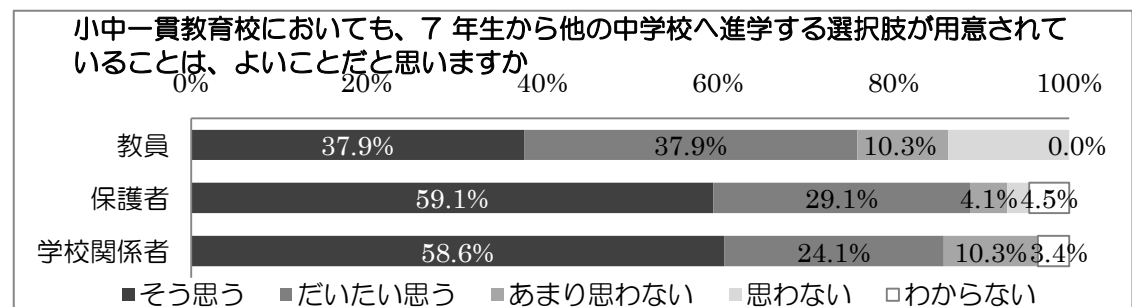
教員の65.6%が大泉桜学園以外からの小学校であっても、学校に慣れるのに時間がかかると回答している。これに対して、保護者のうち45.4%である。

<検証アンケートより>



大泉桜学園以外の小学校から7年生に入学した場合、47.3%が保護者の不安を解消したり大泉桜学園の教育方針等を理解したりすることについて時間がかかると回答している。

<検証アンケートより>



<学校関係者ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小中一貫教育の課題を解決し推進するための先導的な役割	通学区制度の特例、学校選択制度と小中一貫教育校	大泉桜学園は小規模校で人数が少ないから埋もれずに活躍できる。イメージはよくなっていると思う。他の小学校の子供が、中学校の通学区が大泉桜学園だから小学校段階から大泉桜学園に通うことを考えているという話も聞いた。部活動が少ないのでやりたい部活動がある子供は、他の中学校を選ぶ場合があることが課題だ。	学校関係者
		7年生から小中一貫教育校に進学することについて、途中からは入り辛いということは全然ない。何の抵抗もない。すぐ友達ができ、保護者が心配するほどのことではない。初めて小学校に子供を入学させる保護者は、中学校のことまでは考えていないと思う。小学校高学年になって初めて中学校のことを考える。他の小学校の学区になっている地域も、大泉桜学園にしてもらえればとも思う。	学校関係者
		中学校選択制度で学校を選べるなら違うところに進学しようとなる。大泉桜学園は部活動が少ないから他の中学校を選ぶという人は多い。特に文化部が少ない。普通に入って普通に楽しめる部活動が少ない。陸上部や卓球部、パソコン部などが無い。中学校イコール部活動と考える保護者は多い。保護者も子供も部活動と友達で学校を選んでいる感じはある。小中一貫教育校かどうかは気にしていない。	学校関係者
		練馬区として9年間を一貫した教育をねらっているのであれば、私立受験者は別としても、原則として9年間在籍してもらおうというようにしてもよいのではないか。7年生からもどんどん入ってほしいということなのであれば、小中一貫教育校とはいっても、小学校と中学校があるという感じになると思う。	学校関係者

学校関係者ヒアリングでは、小中一貫教育校であっても、6年生段階で中学校選択の機会を与えられたり、7年生から入学してくることが想定されていたりすることについて疑問の声も聞かれた。

■ 検証部会でのご意見

- ・ 学齢簿数に対する入学者数の割合が22年度まで44%台で推移していたのが、一貫校で63%で急にはね上がって、その水準が変わらずにいるということが目についた。それなりに受け入れられていると考えていいのだろうか。
- ・ 小中一貫教育で9年間の連続性を推奨する小中一貫教育校の6年生でも、中学校を選択するという課題が出てくるので、非常に矛盾があると思う。大泉桜学園に愛着をもっていれば当然残りたいと思うが、やりたい部活動が大泉桜学園になければ中学校選択制を使って他校に行かざるを得ない場合もあり、6年生を悩ませる。大泉桜学園に入ったのだから9年生で卒業するまでいなさいという考え方があってもいいように思うが、教育委員会としての考え方を聞きたい。
- ・ 小中一貫教育校になってから大泉桜学園では部活の数が増えたので、中学校を選択する上でほかの中学校を選ぶ必要性がなくなったということも学区内からの入学者

が増えた大きな原因だと思う。

- ・部活動は中学校生活を考えるうえで、子どもにとっては大事な要素の一つだと思う。
- ・大泉桜学園の小学校部を卒業して近隣の中学に進学した子供たちの進学後の状況もわかるとよい。大泉桜学園で50分授業や部活動などを経験したことで、ほかの小学校から進学した子と何か違いがあるのではないだろうか。

■考 察

- ・学区域に居住する児童数に対する大泉桜学園入学者数の割合は、小中一貫教育校開校を機に大きく増加した。
- ・半数近くの教員は、7年生から入学してくるよりも1年生から9年間続けて通学して方がよいと考えているが、7年生から入学してくる生徒について学校に慣れるのに時間がかかると考えている教員は2割弱にとどまる。
- ・小中一貫教育校であっても、7年生から他の中学校へ進学する選択肢があることについては、教員の8割弱、保護者・学校関係者の9割近くが肯定的にとらえている。
- ・以上のことから、小中一貫教育校においては、9年間在籍することが望ましいと考えられる一方で、7年生からの入学にも大きな支障はなく、7年生から他の中学校へ進学する選択肢が用意されていることも肯定的に受け止められている。

(3) 情報発信

大泉桜学園では、学校だよりやホームページによる情報発信は、すべて小中合同で実施しており、小学校・中学校ごとの情報発信は行っていない。

<大泉桜学園ホームページの発信状況>

○学校日記 平成26年度は201件の記事を掲載

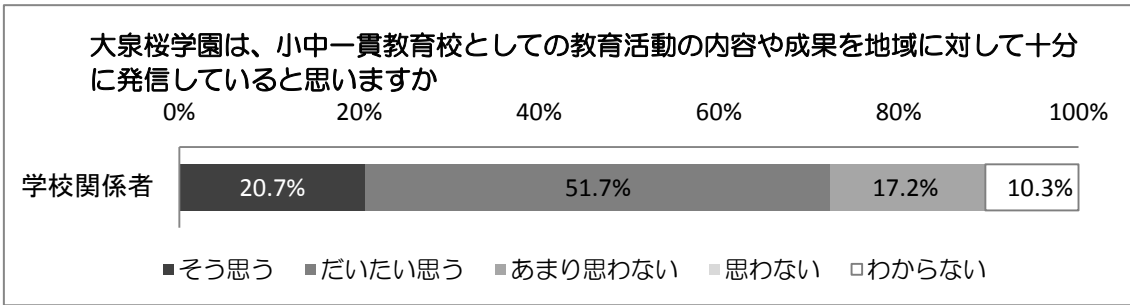
入学式、卒業式、運動会、桜祭（音楽会）、期別朝礼、児童生徒会活動、異学年交流（読み聞かせ、たてわり活動）、校内研究会などの様子を写真つきで紹介している。

児童生徒会役員選挙と立会演説会



9月18日（木）児童生徒会選挙立会演説会と選挙を行いました。5年生以上が選挙権と被選挙権をもち、立会演説会のあとで投票します。練馬区選挙管理委員会から選挙で使う本物の記載台と投票箱を借りて本当の選挙に近い形で選挙を行いました。ねり丸くんとめいすいくんも選挙に立ち合いました。

<検証アンケートより（学校関係者）>



学校関係者の72.4%が肯定的な回答である。

<学校関係者ヒアリングより>

期待される効果	検証項目	内容	対象者
小中一貫教育の課題を解決し推進するための先導的な役割	情報発信	他の小学校に通っていた時には、大泉桜学園の情報はなかった。他の中学校の話が中心で、大泉桜学園のことを何も知らないまま入学した。	学校関係者
		小学校と中学校が一緒になっているということ以外に学校の細かいところについては、外の人間には分からない。いい話は聞こえてこないが、悪い話は聞こえてくるものである。9年間、同じメンバーでは嫌だという人もいる。マイナスのイメージを一度もつと、ずっと引きずってしまう。	学校関係者

学校関係者ヒアリングでは、学校外の人にとっては、大泉桜学園は小学校と中学校が一緒になっているということぐらいしかわからないのではないかという声があった。

■ 考 察

- ・大泉桜学園としては、ホームページなどで積極的に情報発信を行っており、学校関係者の7割強が十分に情報発信していると考えているが、必ずしも地域の保護者などに届いていない可能性がある。

(4) 研究・取組の発表

大泉桜学園は、練馬区初の小中一貫教育校として、小中一貫教育の研究や実践を進める小・中学校を先導する役割を担っている。

開校以来、下記の機会に取組発表を行ってきた。

平成24年11月 ねりま小中一貫教育フォーラム

平成25年2月 大泉桜学園研究発表会

平成25年8月 小中連携推進教員（連携クリエイター）研修

平成27年1月 ねりま小中一貫教育フォーラム

平成27年11月にも開校2回目となる研究発表会を予定している。

〈ねりま小中一貫教育フォーラム アンケートより〉

期待される効果	内容	対象者
小中一貫教育の課題を解決し推進するための先導的な役割	大泉桜学園では、中だるみしやすい4年生が最高学年としてレベルアップしていることを知り、参考にできることはないかと考えた。5・6年生の部活動参加も、力を持って余している子たちを発散させられる場として良いなと感じた。小中一貫のなかで5・6年は中学校への一歩として、1～4年のなかで4年生がしっかりと小学生をひっぱり出す存在としてできる点も参考になった。	教員 (小)
	大泉桜学園の取組は見事だが、施設が一体だからこそその成果だと思う。現行システムのまま連携を進めても、いろいろな面で無理が多く、形だけのものになってしまう。年間計画や校務分掌を共通のものにしていかないと、今後の進展は難しいのではないかと。小中のシステムを一本化していく必要があるのではないかと。	教員 (小)
	職員室が一つということで小中の話し合いが進んだことがわかった。つまり、第一に話し合える場をつくっていくことがこれから連携していくうえで大切だと感じた。小中一貫教育校はある意味特別な形であるが、学ぶべきものは多くあると思う。	教員 (小)
	小中一貫教育校で、小学校の先生が教科で困ったときに中学校の先生が後ろにいるメリットがあるという内容に一貫の良さを感じた。	教員 (中)

ねりま小中一貫教育フォーラムのアンケートでは、施設一体型小中一貫教育校だからこそその成果ではないかという意見とともに、施設が離れた小・中学校にとっても学ぶところは多いという意見も多くあった。

■ 考 察

- ・大泉桜学園としては、研究発表会やねりま小中一貫教育などにおいて、継続的に取組を発表している。施設一体型小中一貫教育校だからこそできることである、という受け止め方もみられるが、大泉桜学園の成果を施設が離れた小・中学校でも活かしているよう教育委員会からの働きかけも必要である。